

751-21



1200501594130

21

東京朝日新聞  
創刊五十週年記念  
戦争美術展覧会目録



念記年周十五刊創聞新日朝

751

21

# 會覽展術美爭單

錄 目





自昭和十三年五月十八日  
至昭和十三年六月五日

於東京府美術館

東京朝日新聞創刊五十周年記念



戰爭美術展覽會目錄



主 催 東京朝日新聞社  
後 援 文 部 省





751  
21

凡 例

- 一、非常時局下國民精神總動員の昂揚に資し、併せて本邦美術界に寄與するところあらんがため、本社は今年創刊五十周年の記念として昭和十三年五月十八日より六月五日まで東京府美術館に於て戦争美術展覧會を開催することになりました。
- 一、右展覧會は日本上代より近代に至る戦争畫、武將肖像、武具、新古武將の筆蹟など二百十三點で、凡そ戦争に因みある天下の至寶は殆んど網羅した觀があり、作品の分布は實に三府二十一縣の廣きに及んで居ります。
- 一、本目録は以上の作品の故事由緒の解説に加ふるに藝術的價值を品等したもので、武具に就ては帝室博物館鑑査官後藤守一氏、筆蹟は帝大史料編纂官高柳光壽氏、繪畫は帝室博物館鑑査官秋山光夫氏及び本社員仲田勝之助を煩はしました。尚題字は帝室技藝員安田靫彦畫伯の揮毫に成り表紙の寫眞は長尾欽彌氏所藏の保元平治合戦屏風の一部を使用しました、ここに記して謝意を表します。

昭和十三年五月

東京朝日新聞社誌



訂 正

- 一、二三 「太平合戦圖屏風」は「太平記合戦圖屏風」とす
- 一、三三 「平重盛像」乃至 四一 「豊臣秀吉像」は「武將像」中に入る
- 一、一一六は全文削除次の通り訂正
- 一一六 軍隊 舍 營 圖 久保田金遷筆 東京 西川義方氏藏

作者は明治八年京都に生る。はじめ幸野模範につき、京都書學校を卒業後東京に移り、父米邊に學ぶ、二十七年日清戰爭に従軍す。

古 畫 (繪卷・屏風・幅)





一 國寶 神功皇后緣起繪卷 二卷 土佐光信筆 大阪譽田神社藏

二卷共に足利義教寄進の奥書がある、永享五年義教左大臣になつた喜ひの餘り畫工に命じて作らしめたのが此卷である。上下共に約三段、金銀五彩を用ひて鮮麗を極め、繪卷表裏期の作としては上乘の作といふべく、探幽の鑑定によれば繪の筆者は土佐光信である。

二 國寶 聖德太子繪傳 一卷 茨城上宮寺藏

太子御一代の物語を具さに書いたもので、鎌倉末から足利初期にかけての作、形式化して來てはゐるが、人物活動の描寫等に捨て難いものがある。これは守屋討伐の場面、寺傳では畫は土佐光信、書は世尊寺定成となつてゐる。

三 聖德太子繪傳 二幅 東京川合玉堂氏藏

聖德太子法隆寺から獻納になつた聖德太子繪傳（屏風）と同種のもので、太子の誕生から葬送までの御傳記を扱つた三幅一對のものであるが、この二幅には中に合戦繪が交つてゐる。筆者は土佐行光と信じられてゐる。行光は鎌倉末より吉野朝頃に在世して多くの名畫を作つた人。

四 國寶 聖德太子繪傳 一幅 愛知本證寺藏

用明天皇崩御せられ、皇儲の問題生ずるに及び、守屋は穴穗部皇子を奉じ、馬子は崇峻天皇を位につけ奉らんとしたが、馬



子は機先を制してまづ穴穂部皇子を討ち奉り、ついで守屋の邸を圍み、守屋戦死して物部氏はこゝに滅んだ。太子は御年十九歳で守屋追討に参加せられ給うたのである。本圖は即ちその場面を描けるもの、至十幅中の一、鎌倉末期の作である。

五 國寶 將軍塚營造繪卷 一卷

京都 高山寺藏

坂上田村麻呂は延暦十六年征夷大將軍として蝦夷を討ちて平けたが、弘仁二年五十四歳で薨じた。嵯峨天皇はいたく惜しませられ、時に山科に墓地を賜り屍を平安京の方に向け、甲冑武器を共に合葬された。爾來國家の非常時には、鳴動したといひ將軍の出征に當つては皆この塚に詣で、勝利を祈願したとの事である。本卷は詞書はないが、この將軍塚の由來を描けるものと云はれる。自由磊落なる筆致は歎稱すべく、筆者を或は鳥羽僧正といひ、或は信實といふが、元より確ではない。しかし鎌倉時代白描畫の粹として注目すべきである。

六 前九年合戰繪卷(殘欠) 一卷

東京帝室博物館藏

もと六卷であつたが、今は詞書全部を欠き、繪三段を存しこの一卷を残すのみ、畫中の人物に「貞任」「義家」等の名を記してゐるので、前九年の役たる事を知るのである。鎌倉時代の作で、卷末に土佐光起が鑑して中務光弘筆としてゐる。抑々前九年の役は天喜四年より康平六年に至る九年の久しきに亘り、鎮守府將軍頼義が子義家と共に豪族阿部頼時及び貞任等と合戰を交へ、終に衣川柵で滅ぼした戰役である。

七 八幡太郎繪詞三卷 渡邊始興筆

東京帝室博物館藏

源義家は頼義の嫡子で、八幡社前に加冠したので八幡太郎と稱した。智勇兼備し文事あり、和歌を良くした。古來我が武將の龜鑑として崇敬されてゐる。この繪卷は義家が永保三年鎮守府將軍と成り、奥州に清原家衡武衡を征討した偉業を畫いたもので、また後三年合戰繪卷と稱せられる。至三卷、幅各一尺余、長さ各四十尺余の大作で、繪は渡邊始興の筆である。始興は近衛家の恩顧を蒙ること篤く、狩野派、倭繪、光琳派等各派を融合した徳川中期の名手で、本卷は能く其の特色を發揮してまゝり、その構圖は鎌倉時代の古繪卷に倣つたものである。詞書は近衛豫樂院家藏が色唐紙に挿寫したもので洵に畫畫双絶の逸品である。

八 重美保元平治合戰圖 六曲一双

東京長尾欽彌氏藏

右半双は爲朝を主題とし、保元の合戰から爲朝が琉球へ落ち延びるまでを描き、左半双は平治の亂で、三條殿の擲打で没落して行く義朝を主題として、その子頼朝が喙ヶ島に居り、義經が鞍馬山にゐる處までを描いてある。足利末期の作。複雑な亂闘の様が實に巧みに描かれてゐる。

九 平治物語繪卷 三條殿擲打卷 摸本一卷 住吉如慶筆

東京帝國圖書館藏

平治元年十二月に勃發した平治の亂を繪卷にしたもので三卷あり、第一卷三條殿擲打はポストン美術館に流出し、第二卷が



即ち本巻で、第三卷六波羅行幸の巻は松平直亮伯の所蔵であつたが、今は帝室に獻納されてゐる。合戦繪巻中で製作の優秀を以て断然群を抜くもの、全篇活躍、殊に武士の描寫は妙を極めてゐる。古から住吉慶恩の作といひ、詞書は有名な歌人家隆則の筆といふ。本巻は住吉慶恩の後と稱する住吉如慶の筆に成つた摸本であるが、同じ平治繪巻摸本中の優品、原本の面影を徳ぶに十分である。

一〇 源平合戦圖屏風 六曲一双

東京帝室博物館藏

鎌倉時代以來、戦記文學と共に戦争繪巻が盛行したが、狩野派に於ても桃山以後裝飾畫の發達につれて戦争畫も描かれた。本圖は筆者不明であるが、筆致風彩は正に永徳の系統を引くもので、徳川初世の狩野派の畫家の作に相違ない。

一一 重美 一谷及宇治川合戦圖 六曲一双

傳矢野三郎兵衛筆 侯爵 細川護立氏藏

畫者矢野三郎兵衛吉重は丹波峰山の城主矢野藤一の孫、肥後細川忠利に仕へて百五十石を領した武人であるが、畫職を兼ねてゐた。中央畫壇には知られず畫史に傳を逸してゐるが、畫蹟は細川家に二三残つてゐる。承應二年六月歿、年五十八。雲谷流に大和繪を加味して一家をなす。合戦屏風中の逸品也。

一二 宇治川合戦屏風 六曲一双

文部省藏

壽永三年源範頼、義経は頼朝の命をうけ木曾義仲を京都に攻めた。義仲は宇治勢多の二橋を撤して防戦した。その時頼朝恩顧の臣、梶原源太景季、佐佐木四郎高綱が名馬を驅つて先陣を競つたことは我戦史の花として人口に膾炙し、畫題として古來多く描かれてゐる。本圖も其の一遺品で、筆者不明であるが、徳川初期狩野派畫人の佳作である。

一三 牟禮 高松圖 一幅 小川破笠筆 東京 加藤正治氏藏

屋島より鹽土瀨を隔て、牟禮高松といふ處あり、相傳へて壽永の帝の行在所、平氏の軍營址といふ。東鑑によれば元暦二年二月十九日源義経は牟禮高松に到り民家を焼拂ふとある。圖はけだし義経を畫いたのであらう。落款に「卯鯉子笠翁行年七十九歳十夢中菴」とあり。破笠は江戸の人、延享四年、八十五歳で歿したれば死ぬ六年前の作である。

一四 富士卷狩會我物語圖 六曲一双 大阪 菅沼正俊氏藏

頼朝は平氏が驕奢の極滅亡せるに鑑み、家來をして儉約をなさせしめ、武藝をけげまし、富士の裾野をはじめ所々に狩を催して、武士の勇氣を涵養するに努めた。かの會我兄弟が幼時より艱難を重ねて、遂に富士の卷狩に夜討をして、父の讐を打つたのは有名な事實で、周わく人の知るところである。

一五 富士の卷狩會我夜討 六曲一双 群馬 下山觀三郎氏藏

無落款、前項参照。



一六 宇治川先陣圖 六曲一双 勝田竹翁筆

東京美術學校藏

宇治川の先陣を描いた屏風は數々あるがこれも異色あるもの、一つである。筆者は三河國加茂郷の郷士で、慶長十八年、徳川三代將軍の世に八才で土井大炊頭に召されて狩野休白の門に入り、二十五歳で家光の御部屋繪師と成つた。歿年は明かでないが、貞享四年八十二歳まで生存した事は確かである。

一七 宇治川先陣圖 双幅 松村吳春筆

男爵三井高六氏藏

松村吳春は四條派の祖。京都の人、初め大西隆月を師とし、後與謝蕪村につく。蕪村歿後、應學を友とし一流を成す。文化八年歿、年六十。

一八 重美堀河夜討圖 額面 菊池容齋筆

東京淺草寺藏

圖は有名な堀河夜討において義經の家來、御厩の喜三太を描いたもの、嘉永初元季秋の年記あり、容齋一代の傑作である。容齋は幕末より明治初年にかけての名手、狩野派の畫を修業し、土佐派をも取入れて一新機軸を出す。「前賢政實」の著あり。明治十一年、九十一歳で歿した。

一九 春日權現靈驗記繪卷 一卷 冷泉爲恭摸

東京帝室博物館藏

春日權現の數々の靈驗を描いた大繪卷、至二十卷より成るものであるが、本卷はその第十九卷で原卷は延慶の頃高隆隆兼の筆と傳へられる。これは幕末の大和繪の名手冷泉爲恭が摸寫せるもの、此種摸本中の優品である。

二〇 蒙古襲來繪卷 二卷

東京帝室博物館藏

元の忽必烈は諸國を朝せしめ我が國へも服屬をすゝめて來たが、朝廷では回答を與へなかつたので、文永十一年十五萬の大勢を以て攻寄せて來た。けれども、わが將士は力戰奮闘してよく之を防ぎ、内地に進入するを許さなかつた。元は又も使を送つて來たが、北條時宗はこれを斬つたので、弘安四年數千艘の船をさし向けて押よせた。わが軍よく迎へ撃ち、大に之を惱ました。かくて七月晦日から閏七月一日にわたつての颶風に敵艦多く損傷し、生きて還るものと三人。

肥後の武士竹崎五郎兵衛季長はこの役に參加し、あつぱれ戦功を立てたから恩賞に預からうとし、土佐長隆、土佐長章父子を召し、おのが戦功の顛末を口授して描かしめ、それを鎌倉幕府に進達した。これを竹崎季長繪詞又は蒙古襲來繪卷といふ。今は帝室の御物となつてゐる。本卷は木挽町狩野家傳來の摸本。

二一 本性坊怪力圖 一幅 岩佐又兵衛筆

東京帝室博物館藏

千早城合戦に於て、奈良般若寺の僧本性坊が怪力を出して大石を投下し、賊軍を粉碎したといふ話を活寫せるもの、事は太平記に記されてゐる。岩佐又兵衛の歴史畫として小品ながらよくその特色を發揮した逸品。もと小屏風の一枚であつたのを懸幅に仕立てたものである。



二三 楠 公 訣 別 圖 一幅 狩野益信筆

東京帝室博物館藏

延元元年五月楠木正成は賊將足利尊氏、直義の東上を防ぐため兵庫に向ふ途上、櫻井驛に當年十一歳の長子正行と訣別したとは太平記の傳ふる處。上に實語が記されてゐる。益信は初め探幽の養子となり、後出で、別家す。駿河台狩野の祖。元祿七年歿、年七十。

二三 重美 太平合戰圖屏風 六曲一双

奈良 飯田眞作氏藏

足利末期より徳川初期にかけて戰記物を題材とする屏風流行し、就中保元平治合戰圖、源平合戰圖等は殊に多く描かれたが太平記合戰圖は少い。此點に於て本圖は珍らしいもので繪の出來も良く、狩野派畫人の一佳品である。太平記は後醍醐天皇補一代を中心として前後五十四年に亘る戰亂を記したものである。

二四 國寶 眞如堂 緣起 三卷 掃部助久國筆 京都 眞正極樂寺藏

紀元二千百二十七年、後土御門天皇の應仁元年から細川勝元、山名宗全の味方はそれ、全國から京都に馳集り、雲霞のやうな大軍が、京都の内外で相戦ふ事十一年の久しきに及んだ、これを應仁の亂といふ。眞如堂は應仁二年大亂の兵火にかゝつて炎上し、一時殆ど廢滅しようとしたが、幾變遷を経て元祿年間今の地に復興された。眞如堂緣起はこの寺の創草から後柏原天皇の御代頃までの顛末を描いたもの。大亂の戰況を示すが目的ではないけれども、これによつて略々中古の騎戦から徒步

戦に移つた當時の状態が窺はれる。繪は大永四年掃部助久國作、詞書は上卷は後柏原院、中卷は尊鎮法親王、下卷は義弘入道、公助大僧正の筆と傳へられる。

二五 倭 寇 圖 卷 一卷 傳明仇英筆 東京 帝大史料編纂所藏

我邦人の支那朝鮮沿岸を寇略したのを彼國では倭寇といつた。しかしそれはわが邊民のみの仕業ではなく、多數支那人なども交つてゐたといはれる。倭寇に關しては、我國に史料なく、況して繪となつたものは全くない。本卷は、明の美人畫家として名高き仇英の作といひ、此種畫品の唯一のものである。

二六 高德公 桶狭間奏誠圖 一幅 森 充筆 侯爵 前田利爲氏藏

嘉永元年加賀藩祖利家卿(高德公)の二百五十年祭に際し金澤藩士森充をして畫かしめたもの。奏誠とは敵の首級を得、功を立つること。

二七 國寶 東照宮 緣起 五卷 狩野探幽筆 栃木 日光東照宮藏

原本に二種あり一を眞名緣起、一を假名緣起といふ。これはその後者で、東照宮の祭神たる徳川家康の誕生より日光に鎮座するに至つたまでの經過を描けるもの。詞書は天海僧正の草案に成り、後水尾天皇の御宸筆を初め、親王攝家門跡等二十數人の筆、繪は寛永年中、將軍家光の命によつて、狩野探幽が畢生の努力をなして畫いたもので、代表的傑作の一である。



二八 關ヶ原合戦圖 八曲一双

伯爵津輕義孝氏藏

慶長十七年、家康の養女として、異父弟康元の女を津輕家に嫁せしめた時の興入道具の一、關ヶ原合戦直後、實戰談によつて相當調べたものらしく、家康進撃の様などよく描かれ、後の畫像の本となれるものゝ如く、描かれた鎧武者實に二千余人を數ふる素晴らしい合戦畫中の隨一と稱せらるゝもの。

二九 重美 職人 盡 鎧師 額装

東京 前川道平氏藏

川越喜多院に藏する職人盡屏風は最も有名なものであるが、同屏風には吉信の印あり。狩野吉信は寛永の頃、永真安信の後見として江戸にゐた事がある人、本圖はそれと同種のもので、鎧師の一面、以て當時の風俗を見るべきである。

三〇 堀江物語 繪卷 三卷 傳岩佐又兵衛筆 大阪村山長舉氏藏

堀江物語は武士階級の闘争及び敵討を主題として筋の變化に富む作、よく戰國時代の武士の思想を物語つてゐる。本卷は又兵衛の作として有名なるものゝ一。かつて日清戰役の際、明治天皇が大本營を廣島にすゝめられたる時、村山家は下命により本卷を夫覽に供するの光榮に浴した事がある。

三一 畫

帖 二帖 岩佐又兵衛筆 侯爵細川護立氏藏

岩佐又兵衛勝以は荒木攝津守村重の末子、三歳の時村重滅びて本願寺により岩佐と名のる。長じて織田信雄に仕へ、信雄滅びて福井に寓す。徳川家光諱名を聞いてこれを江戸に召す。慶安三年歿、年七十三。從來浮世繪の祖とすれども浮世繪は殆どなく、寧ろ土佐派の末流をつけるものと目せられてゐる。

三二 重美 十二類合戦繪詞 三卷

京都堂本印象氏藏

別名を十二支繪卷、又は獸本記といふ。成立年代は壘古頃と考へられ、繪は土佐光弘。詞書は後景光院及び尊道法親王といひ、或は伏見巨貞常親王とも稱せられる。前半は歌合物で後半は撥軍記物である。之を南北朝對立の諷刺と解する説もある。

三三 國寶 平重盛像 一幅 藤原隆信筆 京都神護寺藏

重盛は至誠忠孝の人、清盛不臣の計あるを聞き、面を冒して極諫せしは國史上に著聞せるところである。源賴朝像と共に眞の日本人を描寫せる大和繪肖像畫中の尤品。

三四 國寶 源賴朝像 一幅 藤原隆信筆 京都神護寺藏

神護寺略記に「奉安置後白河法皇御影一鋪、又内大臣重盛卿、右大將賴朝卿、參議右兵衛督光能卿、左衛門佐業房朝臣等在之、右京權大夫隆信朝臣一筆奉圖之者也」とあり、本圖及び平重盛像はこゝに記載せられたるものに該當し、隆信の作なるを知る。隆信は、平安末より鎌倉時代初期における似繪の名手として知られ、春日光長に學びて眞を寫すに妙を得てゐた。又有名なる信實はその子である。元久二年歿、年六十四。



三五 傳 名 和 長 年 像 一幅 長谷川信春筆 子爵福岡孝紹氏藏

名和長年け伯耆國の豪族、元弘三年 後醍醐天皇を船上に奉じて、京都を恢復し、建武延元の頃屢々尊氏を走らしめたが新田義貞と尊氏を攻めて利あらず、従弟信貞等と奮闘して戦死した。像は月代して烏帽子をつけてゐないのが異とされる。また愛馬の像でもある。畫者長谷川信春は等伯の男で、當時第一流の能手。

三六 國寶 北 條 早 雲 像 一幅 神奈川 早 雲 寺藏

箱根の早雲寺は北條早雲の遺命によつて建つた寺で早雲以下五代の墓がある。早雲は初め生母北川殿の縁にて駿河に寄寓し、興國寺城主となり、ついで延徳三年堀河御所の茶々丸を滅ぼし、おのれは落飾して早雲庵宮瑞と號した。明應四年小田原城を奪ひ、これによつて大に豆相に威を示した。永正十八年八十八歳にて歿す。畫像は絹本淡彩、墨染の衣に掛子をかけた法體の座像で、左手を膝上に置き右手に金色の中啓をもつてゐる。落飾後の肖像に違ひない。

三七 北 條 氏 綱 像 一幅 神奈川 早 雲 寺藏

氏綱は早雲の長子、後北條二代目である。小田原に據つて四隣を脅かした。殊に 後奈良天皇の御即位の御料を奉獻したといふ美談がある。天文十年七月五十五歳で歿した。像は土佐光起の畫くところと云ひ、素徳侍烏帽子に蝙蝠をもつ。

三八 北 條 氏 康 像 一幅 神奈川 早 雲 寺藏

折烏帽子に鶴龜の紋ある大紋を着し、美しい熨斗目の小袖を着、蝙蝠をもつた本像は光起筆と傳へてゐる。氏康は氏綱の子、後北條三代の主で、父祖の業をついで豆相武上四州を領し、房總にも侵略を試みた關東無二の武將である。元龜二年十月五十七歳で歿した。又和歌を好み文學に長じてゐた。

三九 國寶 織 田 信 長 像 一幅 狩野元秀筆 愛知長 興 寺藏

圖の下方に銘文あり、天正十一年六月二日、信長公の一周年に當り、その臣與語久三郎正勝が報恩の爲めに、畫家をして描かしめしものなるを知る。紙背に狩野の款、元秀の印あり。即ち由來、年代、筆者の明かなる信憑し得べき像である。元秀は永徳の弟宗秀の嫡子、はじめ元秀といひ、後元松と改む、眞説はその號である。法橋に敍せられ、四十六歳で江戸に歿した。

四〇 國寶 豐 臣 秀 吉 像 一幅 横 濱 原 富 太 郎 氏 藏

秀吉は初は木下氏、後羽柴と稱し、更に豐臣と改む。織田信長に仕へて中國征伐の將となり、信長弑せらるゝや毛利氏と和して急に光秀を打ち、旭日昇天の勢にて海内を征服し更に征韓の軍を發した雄圖は萬人の仰ぐところである。慶長三年伏見城に聽す、六十二歳。唐冠を被り笏を把れる坐像で伊達家のものと殆んど同じであるが、これには背景がない。和畫の趣多く、穩雅の趣に富んでゐる。圖上に慶長三年八月の年記あり、實は近衛三輔院の筆かと思はれてゐる。



四一 國寶 豊臣秀吉像 一幅

侯爵 伊達宗彰氏藏

一六

本書は豊公が薨じて間もなく、生前恩寵を蒙つた富田左近將監知信が描かしたもので、實も同様公の信任深かつた相國寺の僧西笑承兌が筆で、慶長四年二月十八日の年記がある。數多く残れる公の畫像中の大幅で最も眞を傳へた優秀なる作。

武將像



四二 國寶 武田信虎像 一幅

山梨大 泉 寺藏

武田信虎は信玄の父、甲斐武田氏二十二代の主である。まづ甲州を統一して永正十六年甲府の要害に據り、今日の繁華の基を開く、屢々兵を信濃に出し經營大につとめたが、後信玄に駿河へ退けられた。天正二年三月歿、年八十一。圖上に長禪寺二世春國和尚の賛あり、天文二年五月の年記により、信虎歿後二ヶ月に成れるを知る。筆者も亦武將で畫をよくした信虎の第四子、信玄の弟で、逍遙軒信廉といつた人である。信廉には他にも作が遺つてゐる。

四三 武田信玄像 一幅

高野山 成 慶 院藏

名は晴信、信玄は法名である。甲信の間に覇を稱し越後の謙信と川中島に會戦した事は人口に膾炙してゐる。更に關東諸國を攻略した。天正元年四月十二日五十三歳にて逝く。本像はまだ剃髮せぬ以前の壽像で、威風堂々雄姿颯々たるものがある。

四四 武田二十四將圖 一幅

高野山 成 慶 院藏

武田信玄を上にして臣下二十四將を配する圖、圖は信虎の子逍遙軒信廉の筆かといはれ、群像の代表的なもの。逍遙軒は武人にして畫技に長ずる人。

四五 上杉謙信像 一幅

東京 保坂潤治氏藏

上杉謙信は天文十二年元服して景虎、後將軍足利義輝の諱をうけて輝虎と改む。越後長尾爲景の第三子、後に上杉氏を冒し



たのである。二十歳にして越後に號令し、天文二十二年甲斐の武田氏と抗争を始む。その強兵を交へた川中島の戦は人口に膾炙する所。また小田原の北條氏とも干戈を交へ雄威天下に聞えた。天正六年三月歿す、年四十九歳。

四六 重美 大友宗麟 像 一幅 京都 大徳寺中瑞峰院藏

天文十五年菊月桑野大徳寺百五世（瑞峰院二世）靈源大龍國師怡善和尚實あり。大友宗麟は九州に覇を稱した武將、夙に基督教を信じ、有馬晴信、大村純忠等と少年使節を羅馬に派した事がある、天正十四年島津義久は大友を撃つて豊後に侵略せんとしたから、宗麟は援を秀吉に求めた、秀吉の九州征討はこれから始まるのである。翌十五年、宗麟は卒した、享年五十八。即ち本像は晩年法體の像である。

四七 淺井 長政 像 一幅 高野山持明院藏

淺井長政は近江小谷の城主。東江州に於ける強豪として聞えてゐたが、信長の妹を娶つて、事あり元龜元年越前の朝倉義景と共に信長に反抗して、信長家康の聯合軍にあつて敗れ、天正元年織田軍に攻圍されて自尽した。長女茶々は後に淀君となつた。本書像は夫人像と共に淀君が亡父十七回忌供養の爲に、南禅寺の宗純和尚に質せしめて持明院に寄進せしめたもの。

四八 國寶 蒲生氏郷 像 一幅 福島西光寺藏

父の頃より信長に従ひ戦功をたて、信長歿後は秀吉にくみし、天正十八年會津に封ぜられて奥州の領となつた。本圖はその

頃の畫像で、冠に黒袍をつけた正裝で、圖上に元和七年五月七日妙心寺逸傳の銘がある。なほ氏郷は文祿征韓の役に名護屋まで出陣したが病で引かへし、文祿四年に京都で卒した。年四十。

四九 徳川家康大僧正天海對座圖 一幅 狩野探幽筆 東京寛永寺藏

家康は慶長十二年以來天海を尊信し、天海大僧正は黒衣の宰相といはれた程で、兩者の關係は頗る密接なるものあり、本圖の畫上にも天海が贊をしてゐる。畫は名匠狩野探幽の筆で、三代家光が青龍院法祖亮盛大僧部に與へたといふ由緒あるもの。

五〇 國寶 九鬼嘉隆 像 一幅 三重金剛證寺藏

九鬼嘉隆は信長、秀吉に歴任した武將で、殊に水軍に長し、四國、九州の役をはじめ征韓の役に殊功を立てた。秀吉の歿後、家康に對する不平から石田三成の軍に屬したが、關ヶ原合戦に利あらず、紀伊に逃れ、五十八歳を以て自害して終つた。本圖は圖上の清韓の贊によれば嘉隆の三男で金剛證寺の住持たりし蓬雲有慶が畫工に命じて描かしめしもの。清韓は東福寺の學僧でかの「國家安康」の文字によつてはしなくも事件を惹起した京都大佛の鐘の銘の作者である。

五一 重美 前田利家 像 金澤燈明庵藏

前田利家は幼にして秀吉に仕へ、合戦毎に現した武勇と才智とは遂に加賀百萬石の大をなしたのである。而して慶長三年秀吉、臨終に及んでは、利家の手を戴き、涙を流して秀頼の事を託したといはれる。かの家康さへも一目おいてゐた武將。その



面影はこの一幅の中に十分窺ふ事が出来る。

五二 重美 前田 利家 像 筆者不詳 石川長 齡 寺藏

利家公壯年の像。

五三 加 藤 清 正 像 中川壽林筆 京都勸 持 院藏

加藤清正は、初の名は虎之助、夙に秀吉に従つて屢々戦功あり、天正十年の賤ヶ嶽の戦には七本槍の隨一となつた。征韓には先鋒となりて武勳を轟かせ、關ヶ原役には三成と善からずして家康のために九州を鎮め、十六年秀頼家康と會見するや秀頼を護つて秀吉の恩を報ず、ついで熊本にかへりて卒す、歳五十。本圖はその臣中川壽林の畫けるもの。

五四 眞 田 昌 幸 像 一幅 伯爵眞田幸治氏藏

眞田昌幸は武田信玄に従ひ、武田氏滅ぶや織田信長につき、後豊臣秀吉に屬した。關ヶ原役には石田三成に應じて居城上田に據り、秀忠の軍を喰止めて關ヶ原に参戦せしめなかつた。故を以て家康に罪せられんとしたが、子信之の哀訴によつて許され、高野山に放たれた。慶長十六年卒す、年六十五。箱書に「幸弘公御臨寫」とあり。

五五 榊 原 康 政 像 一幅 子爵榊原政春氏藏

榊原康政は徳川四天王の一人で、驍勇にして武略あり、はじめ家康の近侍となり、功によりて家康の偏諱を賜りて康政と稱す。

屢々諸所の戦に殊勳をたて、後上野館林に封ぜらる。慶長十一年卒、年五十九。

五六 本 多 忠 勝 像 一幅 子爵本多忠昭氏藏

本多平八郎忠勝は十三の年より家康に仕へ、到る所の合戦に武勇を現した徳川氏創業の功臣である。「家康に過ぎたるものは二つあり、唐の甲に本多平八」と謳はれた武者振り勇ましき畫像を大阪で描かしめたものである。八度書さかへて九度目で始めて満足されたといふもの。

五七 國寶 藤 堂 高 虎 像 一幅 三重西 蓮 寺藏

五八 國寶 藤 堂 高 虎 像 一幅 三重四 天王 寺藏

桃山時代前後に於て英雄雲の如く起つた中に藤堂高虎も亦その一人である。豊太閤に従ひ征韓役には水軍に將として勇名を轟し、大阪の陣には東軍の將として家康を助け、慶長十二年以來伊賀、伊勢の國守となつた。尊王の志篤く、伊勢大神宮に神田を寄進したことは世に喧傳されてゐる。寛永七年卒、齡七十五。領内各寺院その徳を崇め、其の像を祀るもの少からず。この圖またその遺品として著名のものである。英雄的相貌、衣冠の威容、その人を髣髴せしめる。尚西蓮寺本には高虎の懇親であつた天海僧正の題讀がある。



書 蹟

五九 清水宗治高松守城將士軍容圖 一幅

男爵 清水康春氏藏

二四

箱書に、「此圖雖古來有之、畫蹟之簡今度改撰寫之、且加裝潢、傳子孫者也、寛保辛酉夏、清水元周」とあり、即ち寛保元年撰寫して表具したものである。圖に一々清水宗治以下將士の姓名を記したれば、その誰々かどわかる。



六〇 久邇宮家御所藏

久邇宮邦彦王御遺墨

一點

六一 國寶 源義經自筆請文 一卷

高野山金剛峰寺藏

この請文は、源義經が、元暦元年五月二日に、差出したもので、差出した先は分明でないが、恐らくは後白河院廳であらう。内容は高野山鎮紀伊國阿豆川莊が寂樂寺の所司に押領せられたことを、高野山から院廳へ訴へ出たので、院廳からそのことに就いて義經に指令があつたらしく、それに對し事の趣を鎌倉の頼朝の許に報すべきことを御請け申上げたものである。

(符箋) 「九郎御曹司殿御文」

高野山阿豆川莊事、子細承候了、證文顯然之條、所見及候也、早存其旨、以便宜、且可申入事由候也、神社佛寺事、實不便候、恐々謹言、

五月二日

源 義 經

六二 重美 大江廣元筆奉書 一幅

京都里見忠三郎氏藏

これは大江廣元が頼朝の旨を奉じ、神野、眞國兩庄のことに就いて、山城守護寺の文覺上人に與へたものである。神野、眞國の兩庄は紀伊國にあり、八條院御領と稱して居たけれども陸原兼房の所領であつた。それを兼房は壽永元年高倉天皇御菩提



のために、愛染供として侍從僧正に、その一期の間寄進したのである。然るに侍從僧正の寂後これが文覺の所領となつて居たところ、丹生野八郎光春といふものが、これを濫妨したので、文覺は頼朝に訴へたのである。そこで廣元がこの奉書を文覺に與へて、頼朝の意を傳へ、某宮の神野、眞國兩庄を知行すべきいはれのなき事を述べ、光春の狼藉については、京都にある義經に命じて、光春を京都に召致するやうにとの命であつた旨を傳へて居るのである。因にこの光春といふのは某宮の家人か被官であらう。また旨とあるのは仁和寺宮覺性親王であらうか。文中の宰相中將は即ち兼房である。また元暦元年の四字は後筆である。

神野眞國事、委令申上候了、御定候は、故侍從僧正御房一期之間、愛染王供、宰相中將寄たりければ、一期すぎなん後者なんてう宮の御沙汰のあるべきぞと、御氣色候也、丹生野八郎光春が狼藉いたす事は、九郎御曹司に申て、召上へき事申上候へば、尤さあるべしと御氣色候也、恐々謹言、

五月十八日

左衛門少尉大江(花押)

〔追筆〕元暦元年

文覺御房

六三 重美 北條時頼奉書 一幅

東京 保阪潤治氏藏

この文書は北條時頼が、寛元四年十二月二日越前國宇坂庄の檢注のことに就いて、將軍藤原頼嗣の命を奉じて、幸圓なるも

のを同庄に派遣すべきこと、遠流の百姓を召還すべきやう六波羅に命じたこと等を報じたものである。當時宇坂庄は近衛家の所領であつたから、恐らくは近衛家に宛てたものであらう。文中重時朝臣とあるは六波羅探題北條重時であり、鎌倉少將殿とあるのは、將軍藤原頼嗣である。

越前國宇坂庄間事、雜筆申狀給預候了、於檢注者、不可依狼藉問注、先可被遂行候也、明春可差進幸圓候、至狼藉問注者、召返遠流百姓、可遂其節之由、下知重時朝臣候、彼狀進覽之、以此旨、可令披露給之由、鎌倉少將殿御消息候也、時頼恐惶謹言、

寛元四年十二月三日

左近將監時頼

六四 國寶 北條時宗自筆書狀 一幅

鎌倉 圓覺寺藏

この書狀は北條時宗が、弘安元年十二月二十二日に、鎌倉建長寺の藏主徳詮及び典座宗英の兩人に宛て、支那に赴いて、宋朝禪宗の高僧を、我が國に招聘すべきことを命じたものである。時宗は深く禪に歸依し、建長寺の關溪道隆に師事して居たが、道隆が寂したので、この兩人を宋に遣して、新に高僧を招聘せしめたのである。而して、翌年六月子元祖元を迎へ得たのであつた。

時宗留意宗乘、積有年序、建營梵苑、安止繙流、但時宗每憶、樹有其根、水有其源、是以欲請宋朝名勝、助行此道、煩詮英二兄、莫憚鯨波險阻、誘引俊傑禪、歸來本國、爲望而已、不宣、



弘安元年戊寅十二月廿二日

詮藏主禪師  
英典座禪師

時宗和南

三〇

六五 國寶 北條時宗書狀 一幅

神奈川 圓 覺 寺藏

北條時宗は鎌倉山ノ内に圓覺寺を創建し、弘安五年宋朝の名僧于元祖元を迎へてその開山としたが、翌六年この寺を幕府の祈願寺とし、尾張、上總二國の内の地を寄進した。この書はその際將軍惟康親王の御教書に添へたもので、祖元に宛て、圓覺寺を以て將軍家の祈禱所となせる旨を報じ、食輪已に轉じ、法輪常に轉ずるを述べて祖元の大徳の下に龍華樹下に彌勒の成道せん五十六億七千萬年の未來永劫に至るまで退轉することなるべきを謝したものである。

以圓覺寺、申成將軍家御祈禱所候、仍御教書進之、食輪已轉、法輪常轉、必及龍華之期、感悅之至、不知所謝、委細期面拜恐惶謹言、

七月十八日

時宗

圓覺禪寺方丈 侍者

六六 國寶 北畠顯家筆中尊寺建立供養願文 一卷 岩手中 尊 寺藏

中尊寺は、藤原清衡が長治二年二月陸奥國平泉にその工を起し、天治三年三月二十四日に落慶し、而してその落慶の際して、蓮光和尚以下五百三十口の僧を囑請し、一切經を轉讀供養し、前九年後三年兩役戰役者の冥福を祈つた。その時の願文は藤原敦光が起草し、冷泉朝隆が清書したものであつた。然るに嘉曆四年に藤原輔方がこれを書寫したことがあつたが、その後正本は亡失してしまつたのである。この願文寫は北畠顯家が鎮守府將軍として陸奥にあつた際、その亡失を歎き、正文に擬せんが爲めに、書寫して中尊寺に納めたものである。顯家が鎮守府將軍として赴仕したのは延元元年二月であつて、西上したのは翌二年八月であつたから、在國は僅に一年半に過ぎなかつたけれども、東北文化のためにその雄渾の筆を残したのであつた、本文は長過ぎるから、奥書のみを掲げて置く。

件願文者、右京大夫敦光朝臣草之、中納言朝隆卿書之、而有不慮之事、及紛失之儀、爲擬正文、忽染疎毫耳

鎮守大將軍(花押)

六七 重美 北畠顯家自筆舉狀 一幅 兵庫 小西新左衛門氏藏

この舉狀は陸奥國司北畠顯家が同國の伊賀盛光の申請を朝廷に奏請したものである。即ち盛光は京都三條東洞院の籌役を免除せられんことを顯家に申請し、津輕に於ける戦功を申立てたのであるが、これに對して顯家はその戦功を承認し、盛光の申狀を添へて、これを朝廷に申次ぎ、去年の分のこの籌役を免除せられんことを奏請したのである。盛光が津輕を平定したのは建武元年十一月のことであるから、これはその翌二年のものであらう。因に籌役といふのは洛中警備のために、辻々に設けた



番所に出仕する役であつて、鎌倉時代には幕府の御家人に充て謀されて居たのが、そのまゝこの頃にも引つがれたのであらう。  
伊賀三郎盛光申、三條東洞院露役事、申狀如此、子細見狀候歟、於津輕致合戦之條、無異義候、於去年分者、可有御免之由、頌歎申候、殊可有申御沙汰候乎、謹言、

三月一日

藏人中將殿

陸奥守顯家

### 六八 楠木正成自筆書狀

河内 觀 心 寺 藏

この書狀は楠木正成が元弘二年十月二十五日に龍覺房に宛て、先に後醍醐天皇が、繪旨を河内觀心寺に下されて御祈禱のため同寺の弘法大師作の不動明王の像を禁中へ渡し奉る様命ぜられたので、そのことを正成から同寺僧中へ通じて置いたけれども、二十八日には京都へ着く様に、また龍覺房はそれの供をして上京する様にといつてやつたものである。「元弘三癸酉」の五字は追筆である。

此之間何等事候乎、抑爲御祈禱、觀心寺大師御作不動可奉渡之由、被下繪旨候之間、申遣寺僧方候、明後日廿八日御京著候之様、可被奉渡候也、御共に御上洛候へく候、心事期面候、恐々謹言、

(別筆) 元弘三癸酉 十月廿六日

正 成(花押)

龍覺 御房

### 六九 楠木正行自筆書狀 一卷

河内 觀 心 寺 藏

興國五年五月河内觀心寺の鎮守訶梨帝母の祠が焼失した。然るに神體は無事であつた。そこで楠木正行は深くその奇瑞を感じ、この書狀を觀心寺の寺僧達に與へて、慰問の情を述べ、事の次第を後村上天皇に奏聞すべきことを報じたのである。なほ日附の肩に興國五とあるのは別人の追筆である。

鎮守社壇回祿事、殊以驚歎入候、但神體不燒失、火中御坐之條、未代之奇瑞、言語道斷候、恐可經奏聞候、恐々謹言、

「興國五」

五月廿六日

正行(花押)

觀心寺々僧御中

### 楠木正行自筆書狀

河内 觀 心 寺 藏

興國五年五月に河内觀心寺の鎮守訶梨帝母の祠が焼失したが、その神體は無事であつたので、頼にこれが再興をなし、それが十二月に至つて竣功し、遷宮が行はれることになつた。そこで楠木正行はこの書狀を觀心寺に與へて、これを慶賀し、必ず参詣すべきことを報じたのである。

頼作御造畢、無爲御遷宮、返々目出度喜入候、必々可参詣候、恐々謹言、



十二月一日

正 行(花押)

七〇 重美 楠木正行書狀 一幅

京都 土橋嘉兵衛氏藏

この書狀は楠木正行が河内金剛寺の衆徒に與へて兵糧の催促をしたものである。文中吉野殿とあるのは後村上天皇を指し奉つたのであらう。富部軍人正といふのは未だ詳でない。なほこの書狀は年紀も不明である。

吉野殿御兵糧事、先日令申候下、于今不承御左右候之間、富部軍人正在國之間、連々責申候、公可有御沙汰候、恐々謹言

四月廿四日

左衛門尉正行(花押)

金剛寺衆徒御中

謹言 沼尻但馬守殿

七一 重美 楠木正儀自筆下知狀 一幅

京都 里見忠三郎氏藏

この文書は慶安二年五月十六日、河内の守護である楠木正儀が、同國の守護代である河野邊駿河守に命じて、南禪寺の用材が、無事に上仁和寺及び禁野の兩關を通過するやう命じたものである。これより先、南禪寺は延曆寺僧徒のために山門等を破壊されたことがあり、それらの用材を紀伊邊に求めたものであらう。然るにその用材運搬の通路に當る河内國上仁和寺及び禁

野の兩關所に於て、この邊錢免除の用材通過に對して、地下人等が邊錢を課したらしく、その邊錢の徵集を退くべきことを正儀から命じたのである。なほ書中慶安二の三字は追筆である。

南禪寺材木船事、於上仁和寺并禁野、地下蠶違亂云々、太不可然、早止其綺可勘違之旨、可加下知狀如件

慶安二五月十六日

左 兵 衛 督(花押)

河野邊駿河守殿

七二 重美 菊池武光施行狀 一幅

東京 保阪潤治氏藏

これは正平十三年九月十七日に肥後國の守護菊池武光が、征西大將軍宮原良親王の令旨を承けて、その令旨に添へて令旨の趣を遵行すべきことを守護代に命じたものである。是より先、親王は同國守富庄の半分地頭職を、兵糧料所として愚良筑後守惟澄に賜つたところ、河尻入道實覺及びその子息の七郎といふ者が、これを濫妨した。かくて惟澄はその濫妨を停められんとを、親王に願つたので、親王は正平十三年八月十三日に令旨を賜つて、武光をしてこの地を惟澄に交付せしめ給うたのである。そこで武光はこの令旨を施行して、この狀を守護代に與へ、守護代をして窪田越中介といふものと共に、守富庄に赴いて、令旨の如く處分し、報告の請文を出す様に命じたのである。

愚良筑後守惟澄申、兵糧料所肥後國守富庄半分地頭職事、如去月十三日重御教書者、河尻七郎代旨不遵退云々、早任被定置之法、嚴密可被沙汰居下地於惟澄云々、任被仰下之旨、窪田越中介相共在彼所、遂其節、載記請之詞、可被注申之狀如件



正平十二年九月十七日

守護代

三六

武光(花押)

七三 國寶 鞍馬寺文書一卷

京都 鞍馬寺藏

新田義貞署判御教書

延元元年五月官軍は生田森、湊川に敗れたので、足利尊氏の上洛を阻止することが出来ず、後醍醐天皇は叡山へ行幸遊ばされた。この御教書はこの際、叡山に於いて、官軍の總帥新田義貞から鞍馬寺の衆徒に與へて、政泰を以て觸れ遣す通り、尊氏以下凶徒追罰のことに從へと命じたものである。

尊氏以下凶徒等追罰事、以政泰所被觸遣也、得其意、嚴密可被致其沙汰狀如件

延元元年六月廿三日

左中將(花押)

鞍馬寺衆徒御中

七四 名和長年書狀

この書狀は、名和長年が鞍馬寺衆徒に與へて、没落の敵を召捕るべき旨をいひ遣したものである。

長年は元弘三年二月、後醍醐天皇の隱岐から伯耆に着御せられた時、これを迎へ奉り、以來供奉の人数にあつたが、延元元年六月に戦死した。この間にあつて京都附近の騷亂といふのは、元弘三年より外にないから、この書狀もまた同年のものであらう。書中の祐賢といひ、また但馬公といふも未だ詳かでない。

當山深依奉還入候、使者進祐賢候之處、御不審尤本望候、就其當所之路次肝要候歟、没落輩候者、可被召捕候、公私目田候、委細之旨、但馬公令申候了、恐々謹言、

八月十三日

伯耆守長年(花押)

謹上 鞍馬寺衆徒御中

七五 重美 太田道灌自筆書狀 一幅

東京 保阪潤治氏藏

太田道灌のことに就いては甚だ審でない。この書狀の如きもまゝその例に漏れない。この書狀は道灌から沼尻但馬守に與へたもので、近々下總に向つて何等かの調議をなすべきを述べ、併せて、長井六郎といふものゝ進退につきて報じたものである。下總に對する調議といふのは分明でないが、古河公方成氏か又は千葉の千葉孝胤かに對して、何等かの外交交渉に出づることをいつて居るのであらう。道灌は成氏のために、文明十一年七月千葉孝胤を下總根原に攻め、ついで同年十二月にはまた弟資忠等をして同じく孝胤を同國臼井城に攻めしめたことがある。また長井六郎のことは分明でないが、長尾景春に與向した武藏長井城と關係があるかも知れぬ。道灌は文明十一年十一月同城を攻めんとして居り、翌十二年正月には長井城を陥れて居る。何



れにしてもこの書状は長井六郎處分のことについて述べたもので、沼尻但馬守は長井六郎の縁者でもあらうか。但馬守及び文中の小會禰某は道灌と同じく扇谷上杉定正の家臣であらう。

近日者不申通候間、御床敷存候處、具不給候、恐悦主候、向下總御調籠近々趣候、爰元事者、毎事可御心安候、仍長井六郎方進退事、無相違趣候、定可爲御悅喜候、依御一左右可有出仕趣候、於道灌本意満足候、此方之時宜、巨細小會禰殿可被傳聞候間、不能委曲候、恐々謹言、

八月十六日

沙彌道灌(花押)

七六 北條早雲自筆書狀一帖

子爵 小笠原長定氏藏

北條早雲は、伊勢新九郎といひ、入道して早雲庵(瑞瑞)と號した。初め今川氏親の生母北川殿の所縁によつて駿河に寄寓したが、功を以て同國興國寺の城主となり、ついで伊豆、相模を略し、つひに後北條氏五代の基を開いたのである。然るにこの頃松平長親が西三河に起つて、東三河に攻め入り、田原に迫つて來た。そこで田原の城主戸田彈正忠憲光は援を氏親に求めた。依つて氏親は永正三年八月早雲と共に兵を率ゐて憲光を救ひ、長親の屬城今橋(今の豊橋)に牧野傳藏入道古白を攻めた。かくて十一月に至つて古白は自殺し、城は陥つた。この書状はこの攻圍の陣中から、早雲が信濃松尾城主小笠原左衛門佐定基に送つたもので、自ら伊勢の關氏の一族たることを述べ、併せてその戦況を報じて居るのである。早雲の出自に就いては、從來諸説區々として明瞭を缺くこと甚しいが、この文書は、早雲自身の記すところであつて、諸説の中にあつて、最も信用出来る

標に思はれるのである。

雖未申入候、以次令啓候、仍關右馬允方事、名字我等一林に候、伊勢國關與申所依在談、關與名乘候、根本從兄弟相分名字にて候、以之標之儀、只今別而申通候、諸事無御等閑由被申候、別而我等悉存候、以後者、關方同前に無御等閑候者、可爲満足候、次當國田原彈正爲合力、氏親被罷立候、拙者罷立候、御近國事候間、違儀候は、可慮存候、然而今橋要害悉引破、本城至堀岸陣取候、去十九卯刻に、堀城押入乘取候、爰元急度落居候者、重而可申展候、仍太刀一腰作助光金覆輪進候、表記儀計候、此旨可得御意候、恐々謹言、

九月廿一日

宗 瑞(花押)

謹上 小笠原左衛門佐殿御宿所

七七 武田信玄自筆書狀

奇玉陽 雲 寺藏

この書状は武田信玄がその出陣に當り、信濃小諸の城主小山田備中守に與へて、同國戸石城再興のために出陣したと唱傳せしめたものであつて、弘治頃のものではないかと思はれる。即ち是より先、天文二十二年信玄は同國葛尾の村上義清を逐ひ、つひに越後に走らしめたが、この時戸石城をも占領してこれを破却したのであつた。そこでその後東信濃に出兵するに當つてそれが軍事行動ではなくこの戸石城再興にある旨を揚言せしめたものと思はれる。



急度染自筆候、抑來六日不圖出馬候、世上之比判をば、砥石爲再興出陣之由、堅可被申觸候、努々勤などの事、不可有流布候、又其口ヲ可出馬候、然處に振舞之支度、城之拂地などは、さのみ不可被致結構候、必々砥石爲普請父子出張の由、可有比判候、恐々謹言

正月廿八日

晴

信(花押)

小山田備中守殿

七八 武田信玄自筆願文

靜岡 官幣大社 淺間神社藏

武田信玄は四方に兵を出して、上杉謙信、北條氏康、氏政父子等と戦つたが、永祿十二年氏政及び徳川家康の挾撃に會つて、駿河より退くの止むなきに至つた。されど翌元龜元年には再び駿河に入つて北澤城を抜き、以て氏康父子に逼つたのである。この願文はこの年四月自ら筆を執つて、同國富士淺間社に納めて、氏康、氏政父子の滅亡を祈つたものである。併しながら後氏康父子とは和睦して専ら三河、遠江の經略に従ひ、以て西上の機會を窺つたのであつた。

願文

今度順遠陽倒豆相兩州、氏康、氏政滅亡、如信玄存志達本意、奏太平之凱歌、令得歸府安泰者、百歲以來相違之御社願、如舊規奉寄附、如在之禮莫不可有怠慢者也、仍如件、

永祿十三曆庚午四月廿三日

信玄(花押)

南無富士淺間大菩薩

七九 上杉謙信覺書 一幅

東京 保阪潤治氏藏

この覺書は天正元年二月上杉謙信が、越後國黒龍城主長景連に與へたものである。これより先武田信玄は西上を企て、部將秋山信友をして東美濃に侵入せしめて、織田信長を牽制し、自らは大軍を率ゐて遠江に入り、徳川家康と三方原に戦つて、大にこれを破り、三河に轉じて諸城を脅かした。そこで信長と家康は屢々書を謙信に送つて、信玄の慮を衝くやうに依頼したけれども、謙信は越中に出陣して居つて、その希望に答へることが出来なかつたのであるが、つひに景連を岐阜に遣して、信長と折衝せしむるに至つたのである。この覺書は即ちこの時景連に交附したもので、先に信長が熾いた延暦寺を信玄が甲斐に再興しようとして居るのを妨げ、然もこれを謙信自身が再興しようとして、その承諾を信長に求め、又朝倉義景の懇請に依つて、義景と聯盟して居る淺井長政を、信長が攻めない様にと申送り、信長、家康は専らその領國を平定するやうにし、然る上相共に信玄を擊破しようといつて居るのである。文中林平右衛門尉とあるのは信長の侍臣であり、兩人とあるのは謙信の家老直江景綱と河田長親とであり、宛名の長與一は即ち景連である。

覺

一か様に林平右衛門尉方へ、兩人之從所爲申越候、乍去信長被管機に候者、此以條書、申分用捨之事



一山門再興先納得候而可然候、左様に候へば、信長畢竟山再興候に成候間、信玄失手候者、都鄙之唱、又信長きたうにも成、可然歎之事

一淺井身上之儀も、是も先々義景被申成に尤候、左様に候者、信長、家康分國被相辭、其上信玄則時に、愚考、信長、家康申合可打斷候、其以後者、淺井者不及申、何方へ之信長存分も可相届候、此段可申分事、

右如何共、信長備堅固に候へかすと、覺悟候而申候、於可黨機に者、一切無用、以上

三月十九日

謙信(花押)

長興一殿

八〇 重美 織田信長誓約書 一幅 東京 徳富猪一郎氏藏

この文書は、元龜元年正月二十二日、織田信長と足利義昭とが互に契約して、それを斡旋した日乘と明智光秀とに宛てたものである。是より先、義昭はその家を起さんとして諸所に流遇したが、つひに信長の許に至り、永祿十一年擁せられて京都に入り、將軍職に就くことが出来た。そこで義昭は信長を頼る體とし、これを遇すること甚だ厚く、父と稱した程であつたが、信長の勢力が盛んとなるに及んで、これを妬むやうになり、兩者の間は漸く不利を生ずるに至つた。この契約はこの際のもので、信長から條件を提出し、僧日乘と信長の家臣光秀とが中に立つて折衝して出来上つたものである。内容は、義昭が諸國へ出す内書には、必ず信長の添状を要すること、從來義昭が出した命令はこれを取消すこと、義昭に對して忠節のあつた者に

與へる恩賞の地がない時には、信長の領地の中で義昭の意のまゝに與ふべきこと、天下の全權を信長に委任する上は、何人も雖も信長の意のまゝに處分すべきこと、及び皇室を尊崇すべきこと等を定めて居る。併しながら、この後義昭はつひに信長と離はずして京都を出奔してしまつた。

○印文  
義昭實

條々

一諸國へ以御内書、被仰出子細有之者、信長に被仰聞、書狀を可添申事

一御下知之儀、皆以有御棄破、其上被成御思案、可被相定事

一奉對公儀、忠節之輩に、雖被加御恩賞御褒美度候、領中等於無之は、信長分領之内を以ても、上意次第に可申付事

一天下之儀、何様にも信長に被任置候上者、不寄誰々、不及得上意、分別次第可爲成敗候事

一天下御靜謐之條、禁中之儀、毎事不可有御油斷之事

己 上

永祿十參

正月廿三日

日乘 上人

明智十兵衛尉殿

朱印  
下布武



八一 重美 織田信長假名消息 一幅

東京 保阪潤治氏藏

この消息は織田信長が豊臣秀吉の室杉原氏に與へたもので、杉原氏が信長の許に來調したことを喜び、土産物の華美であつたことを酬し、その時の杉原氏の容姿が一段と見事であつたことをたゞへ、秀吉が杉原氏をば不足に思つて居る由を申して居るけれども、それは甚だ不當であつて、杉原氏程の配偶は秀吉には再び得難い由を述べ、更に杉原氏に諭して、態度を重々しくすべきこと、格氣を慎むべきことを教へ、併せてこの消息を秀吉にも一見せしめて、秀吉の注意をも促さんとしたものである。この消息は年月は詳でないが、恐くは天正四年信長の安土へ移轉の後間もなくのものであらう。なほ文中に秀吉のことをば「はげ鼠」といつて居るが、秀吉の風貌を窺ひ得るやうにも思はれる。

おほせのごとく、こんどは、このちへはじめてこし、けさんにいりしうちやくに候、ことにみやげ色々つくし、中々めにもあまり、ふでにもつくしがたく候、しうぎばかりに、このはうよりも、なにやらんと思ひ候へば、そのはうより見事なる物もたせ候あひだ、べちに心さしなくのまゝ、まづこのたびはとどめまいらせ候、かされてまいり候のとき、それにしたがふべく候、なかんづく、そののみめふり、かたちまで、いつぞやみまいらせ候折ふしよりは、十の物廿ほどもみあけ候、膝さちらうれん／＼ふそくのむね申のよし、こん五だうだん、くせ事に候か、いづかたをあひたづね候とも、それさまほどのは、又二たび、かのはげねすみあひもとめがたきあひだ、これよりいごは、みもちをようくわいになし、いかにもかみさまなりに、おも／＼しく、りんぎなどにたち入候ては、しかるべからず候、たゞし、をんなのやくにて候あひ

だ、申もの、申さぬなりにもてなし、しかるべく候、なをぶんていを、はしほにはいけんこひわがふものなり、又々かし

く  
〔上書〕「膝さちらうれん／＼なごま

の ち

八二 豊臣秀吉自筆消息 一幅

大阪 上野精一氏藏

この消息は豊臣秀吉が、文祿元年肥前名護屋の本營から、京都にある生母天瑞院に送つたものである。宛名に宰相とあるのは天瑞院の侍女であらう。端午の節句の祝儀として惟子を贈られたことを酬し、朝鮮の諸城を占領せることを報じ、重陽の節句の祝儀は支那の都にて受領すべく、支那占領の上は迎へを差出すべきことなどを述べて居る。

かへすべ、一だんとそくさい、きのふりきう(利休)のちやにて御せんもあがり、おもしろくめでたく候まゝ、御心やすく候べく候、又そもじさま御せんまいり候や、ゆさん候て、物まい(り脱か)候て、なぐさみ候べく候、

こなたの事あんじ候事むやうにて候、よそありきいたし候ほど、そくにて、めしも一だんとたべ申候、(せつ)つかたひらとりそへ給候、ゆく久しくとゆわい入候、はや／＼こうらい(高麗)のしろ／＼とり申、こうらいのみや(こ脱か)へも、とりまかせに、人数つかはせ申、から(唐)おも九月ころにはとり可申、九月のせつ)つかの御ふくは、からのみやこにてうけとり可申候、一だんとわれ／＼そくさいにて、めしおもあがり候、心やすくおほしめし候べく



候、からをとり候て、そもじさまのむかひを参上可申候、かしく。

五月六日

メ

さいしゅう

なごやより

大かう

### 八三 重美 豊臣秀吉自筆辭世和歌 一幅

子爵 木下利福氏藏

秀吉は慶長二年五月から病に臥したが、年老いて再び起ち難いことを覺悟したらしく、然も嗣子秀頼は尚ほ幼かつたので、將來のことを心配し、徳川家康等五大老、石田三成等五奉行などに誓書をかゝせたり、或は遺言などを興へたりして、願る懼憚した如くであるが、この辭世の和歌は、それとは打つて變つた様子が見えて居る。この詠草は何時のもとも判然しないが、秀吉はこの年八月十八日六十三歳を以て薨去した。松とあるのは秀吉の一字名である。因に秀吉の和歌はその右筆大村由己が作つたものが多いといはれて居るが、それは誤であらう。秀吉の和歌はこの他にも多數残つて居り、由己もこの頃には既に歿してゐる。

つゆとをちつゆときへにしわがみかな

なにわの事もゆめの又ゆめ

松

### 八四 徳川家康自筆消息 一卷

東京 保阪潤治氏藏

この書状は徳川家康がその女ちよほに興へたもので、某處よりの歸途、その地に立寄るべきであるが、年末忙中にあるを以て、立寄ることが出来ないといつてやつたものである。宛所に新城とあるのは、三河の新城であつて、ちよほの夫與平信昌の居城である。信昌は天正三年長篠籠城の功によつて、家康からその女をめ合はされ、翌四年新城に移り、十八年家康の關東入國に従つて上野小幡に移つたのである。なほ家康が大納言となつたのは天正十五年であり、またこの間に家康が十二月に三河を通過したのは十七年だけであるから、この消息は天正十七年のものとすべきである。

返々、としのきわめにて候まゝ、より候はず候、めでたく、春はより候べく候、

ふみたまはり候、めづらしく見申まいらせ候、さてはそなたへより候はんと思ひまいらせ候へども、としのきわめにて候

まゝ、よりまいらせ候はず候、はるはよりまいらせ候まゝ、その分心候べく候、かしく。

メ

大納言

新城返事

この消息は徳川家康が、その女ちよほに答へたもので、その來書を喜び、某事件の存分の如く無事にあつたといひ凱陣の上詳しく語るべきことを報じたものである。この某事件といふのは未だ詳でないが、家康の大納言であつたのは天正十五年七月から慶長元年五月までであるから、天正十八年の小田原征伐か文祿元年の朝鮮征伐かをいつて居るのではないかと思はれる。な



は朝鮮征伐には文祿二年に名護屋から江戸に凱旋してゐる。恐くはこの時のものであらう。

返々御さうふん事ふしになりませ候、御文給候、うれしく見まらせ候、さては……もとふしになり候ま、

御心安候べくやがて候かいちんとき申べく候、かしく、

(上書)ノ

ちよほ申給へ 御返事

大なごん

この消息は家康京都からその女ちよほに與へたもので、ちよほから新年の祝儀として小袖を贈られたことを謝し、今年は歸國すべければ、面會して積る物語をしようといつてやつたものである。宛所に「おはた」とあるのは上野小幡で、ちよほの夫奥平信昌の居城である。信昌は天正十八年家康の關東入國に従つて、三河新城から、上野小幡に移つたのであるから、この書狀はこの十八年から家康が大納言を罷める慶長元年までの間のものであり、その間に家康が京都で越年したのは文祿三年だけであるから、この消息は同年のものとして差支ない。

返々、いく久しくといわい(ひ脱かり)

のはじめのよろこびとして、こそで一かさね給候、いく久しくといわ入まらせ候ことはくだりまらせ候べく春

候ま、けさんにて申まらせ候べく候、めでたく、かしく、

おはた  
返事

大なごん

### 八五 徳川家康自筆消息 一幅

東京 萩野 端氏藏

この消息は徳川家康がその女ちよほに宛て、新年の祝儀を述べたものである。差出に「大ふ」とあるのは内府で内大臣といふことである。家康が内大臣であるのは慶長元年五月から同八年二月までであるから、この文書もその間のものである。ちよほは家康の長女で母は樂山殿關口氏、松平信康の同母妹であつて、奥平信昌の妻となつた。

返々、たひく御ふみ、御うれしく見まらせ候、

このはる、御よろこび、いつにもすぐれ、めでたく思ひまらせ候、さては御そくさいにならせられ候よし、めでたくお

もひまいらせ候、われくもそくさひにて御いり候ま、御心やすくおぼしめし候べく候、めでたくかしく、

ちよほ 申給へ

大 ぶ

### 八六 加藤清正自筆書狀 一幅

熊本 本 妙 寺藏

この書狀は、加藤清正が夢を見たので、日頃信仰して居る日蓮宗の三十番神に祈禱をするやう、熊本の本妙寺に依頼したものである。その夢といふのは、秀吉が將に出陣せんとして居り、その側には既に物故した清正の同輩等が何候して居る。清正



は出仕しようとして赴く途中、鷹が川へ風に吹き落されて居るのを助けてとまり木に居て行く。然るに秀吉はこれを見て清正が隙があつて遊んで居る様に思ふ。そこで清正は事情を申し上げやうとして夢がさめたといふのである。清正が豊臣氏に對して忠誠を致したことは、今更述べるまでもないが、これは禽類を愛護したその一面を窺ふべき好資料である。

ゆめの事かきつけ進之候、三十ばんじんへ御きねんあるべき事

一大かうさま御座候所、御きげんよく見申候事

一ちんのたちのていにて見申候事

一人のたか、かわへ、かぜにふきおとされ候を、我等とりあげ、すへ候てまいり候を、大かうさま、御座所より御らん候て、ひまありがほにて、たかすへきたり候やうに、御意見之様見へ申候間、我々とりあへず申上候は、人のたか、かわに申候て、なんぎいたし候を、あまりいたわしさに、とりあげ、かんびやういたし候はんと存候て、すへ申候よし、申上候かとおほへ申候、そのほか、はて申たるほうばいも、一兩人見申やうにおほへ候へ共、何も出陣之て（い脱か）にて見申候

以 上

八月廿五日

本 妙 寺

清 正

八七 眞田幸村自筆書狀 一卷

東京 小平三郎氏藏

この書狀は、元和元年三月十九日に眞田幸村が大坂城中から、姉婿の小山田壹岐守及びその子主膳に宛てて送つたものである。是より先慶長十九年十二月豊臣徳川兩氏の間和議が成立して、大坂冬陣は終つたけれども、兩者の間ではなほ密に再戦を期して居た。この間にあつて幸村は必死を覺悟して居たのであつて、一日先は知られぬ事であるから、自分のことなどは、浮世にあるものとは思つてくれるなどこの書狀の中でいつて居る。この後聞もなく四月二十五日兩者の和は破れ、つひに大坂夏陣となり、幸村は五月七日岡山口で戦死した。署名に信繁とあるのは即ち幸村である。なほ幸村といつた確證といふ程のものはないけれども、幸村とも稱したやうである。

向々別紙に可申入候へども、指籠無之候、又御使如存候、少用取亂申、早々如此候、何も追而具可申入候、以上、

邊際預御使札候、其元相替儀無之由具承、致禮足候、爰元おゐても無事に候、可御心安候、我等身上之儀、殿様御懸比も大かたの事にては無之候へども、萬氣遣のみにて御座候、一日く〜とくらし申候、面上にならで委不得申候間、中々書中不具候、様子御使可申候、當年中も靜に御座候者、何とぞ仕、以面申承度存候、御床敷事山々にて候、さだめなき浮世にて候へ者、一日さきは不知事候、我々事などは、浮世にあるものとおほしめし候まじく候、恐々謹言

眞左衛門佐



三月十九日  
小壹殿  
主膳御報

信

繁(花押)

五二

新  
畫  
(日本畫)



藤

畫

(日本畫)

八八 守屋大連一幅 安田鞞彦筆 侯爵細川護立氏藏

物部の守屋は父に父で大連となる。敏達天皇の御宇佛法漸く世に行はれ、蘇我馬子をはじめとして之を尊崇したが、守屋喜ばず、天皇にこれを禁せん事を請うて佛像を難波の堀江に投じてより相争ふ事甚しかつた。本圖は明治の十一年秋の第一回國畫玉成會に出品したもの。

八九 岩清水圖一幅 水野年方筆 東京帝室博物館藏

源義家が目で岩をつき、滾々と溢れる岩清水を掬んだといふエピソードを描いたもの。作者は大蘇芳年門、明治四十一年歿四十三。本畫は絶筆にて同年未亡人より東京帝室博物館に寄附せし遺作中の傑作。

九〇 殿 二曲半双 尾竹國觀筆 東京立浪彌右衛門氏藏

源義家と安倍貞任との勿來關に於ける戰、櫻花ちる奥地に力戰苦闘せる殿の様が偲ばれる。國觀若年の作。國觀は明治十三年新潟縣生、小堀綱音門。

九一 三條殿燒打圖一幅 狩野友信筆 東京帝室博物館藏

平治物語の一駒、三條殿の火に公卿武士達と入亂れて喧擾する場面。狩野友信は春川と號し、狩野雅信の門、明治初年英人ウィグマンに洋畫を學び、後東京美術學校教授となる。明治四十五年歿、年七十。



九二 重 盛 諫 言 圖 一幅 榊原文翠筆 東京帝室博物館藏

畫者は京都の土佐派の畫家、明治二十二年東京美術學校教授となる。本圖は明治二十六年シカゴ萬國大博覽會のために描きたる作、文翠齋源朝臣長敏圖之の款記あり。

九三 重 盛 諫 言 圖 一幅 川合玉堂筆 東京細川力藏氏藏

作者二十六歳の作、日本繪畫協會出陳。作者ははじめ望月玉泉、幸野樸嶺につき後橋本雅邦に師事す。現邦畫壇長老の一人。

九四 宇 治 橋 合 戰 圖 六曲半双 小堀鞆音筆 東京瀧澤修之助氏藏

治承四年源三位頼政は清盛等が法皇を幽し奉れるを見るに忍びず、卒先して平氏を討伐せんとし、法皇の御子以仁王を奉じて、令旨を諸國にひそめる源氏に傳へ、僧兵と結んで兵を起さんとしたが、その謀もれて敵兵に襲はれ、宇治川に戦つたけれども、衆寡敵せず忽ち敗北して平等院に入つて自了した。本圖は頼朝が宇治橋の橋板を撤して敵を待てる處。明治二十八年の作。

九五 佐 々 木 高 綱 像 一幅 高野山 泰 雲 院藏

佐々木高綱は梶原景季と夫々頼朝より賜へる名馬に打乗つて、宇治川に先陣を争ひ、一番乗りの名譽を得た事は人口に膾炙せるところである。考古畫譜によれば原畫は寺院と共に焼失し、後年菱田春草をして描かしたものだといふ。

九六 武 士 圖 一幅 小堀鞆音筆 東京美術學校藏

爲朝とも見らるべき源平時代の鉞形うつたる兜をつけ、弓矢つがへたる雄々しき若武者の姿が痛快に畫き現はされてゐる。本圖は作者三十歳の作で、明治三十年日本繪畫協會第二回共進會に於て銅牌を受けたもの。

九七 洞 窟 の 頼 朝 一面 前田青邨筆 男爵 大倉喜七郎氏藏

治承四年八月頼朝は大庭景親に攻められて絶體絶命、洞窟中に入りて日の暮るゝを得た、といふ史上に名高き石橋山合戦を畫いたもの。畫者は十二神將が護衛せる嚴肅な感じを現すべく、このシーンを思ひ出して本圖を製作したといふ。昭和四年第十六回院展に出品し、同年の「朝日賞」に授けられたもの。作者は明治十八年名古屋生、梶田半古門。

九八 繼 信 最 期 圖 一幅 下村觀山筆 横濱 原良三郎氏藏

佐藤三郎兵衛繼信は忠信の兄、義經が奥州に居た頃から之に仕へて陣々軍功あり、屋島の役に原義經は勳功を以て頼りに大將義經を窺つた、部下の勇士が大將の馬前に馳塞がり立ふさがつて十余騎その身を犠牲にしたが、繼信も亦、その矢に當つて忠烈な最期を遂げた。時に年二十八。本圖はその最期を描いたもの。明治三十年の日本繪畫協會第三回共進會に出品せられたる大作で、今日の所謂「會場藝術」の先驅をなせるもの、竪六尺六寸五分、横十一尺七寸。

九九 矢 表 六曲一双 松岡映丘筆 東京岡野繁藏氏藏



作者は國書院の盟主で特徴ある歴史畫家であつたが、惜しくも最近歿せられた。本圖は大和繪の興隆に志し、世の毀譽變転の矢表に立たんと決意せる意志の表現で、昭和十二年に成り、第一回國書院展覽會に出品せる掉尾の力作である。畫因を平家物語屋島合戦の史實にとり、右半双の中、紫威の大鎧着けたるは大將義経で、後向なるは弁慶、義経の馬前に敢然躍り出で、矢表に立てるは佐藤繼信。左半双に劍を撃したるは菊王である。

一〇〇 油

斷 六曲一双 尾竹國觀筆 文 部 省藏  
油斷大敵、不意の襲來に周章狼狽、混雜感亂を極めた陣中の狀が巧に描き出されてゐる。弓を張れるは既喜三太か、恐らくは堀河夜討を畫圖としたものであらう。堀河夜討とは源頼朝が土佐昌俊をして七太寺詣に事寄せて上落させ、六條堀河の義経の宿所を夜襲した事件である。第三回文展に於て二等賞を得た作。

一〇一 火

牛 六曲一双 津端道彦筆 新潟 藤井卯吉氏藏  
筆者は明治元年新潟縣に生る、山名實義に師事して土佐派を研究し、後津端式繪具發明者として知らる、最近歿せられた。本圖は大正元年の作にかゝり、第六回文展に出品して二等賞を得た、源平盛衰記に見える木曾義仲の討伐の時火牛を用ひたといふ故事を描けるもの。

一〇二 蒙古襲來及碧蹄館戰圖

六曲一双 松本楓湖筆 男爵 岩崎小彌太氏藏

弘安四年夏、數千艘の戰艦を以て戦ひつた元の軍勢十余萬の颶風にあつて滅亡する狀を半双に描き、他の半双に征韓役の碧蹄館の戦を圖せるもの。明治二十八年第四回内國勸業博覽會に出品した作で、作者は菊池容齋の門に遊び、歴史畫家として有名なりし畫家、大正十二年八十四で歿した。本屏風はけだし遺品中の傑作である。

一〇三 小早川隆景破明軍圖

一幅 男爵 小早川四郎氏藏  
筆者は舊田安藩士の男、川邊御楯に土佐派の畫法を問ふ。本圖は明治二十七年、平壤戰勝の報を得て歡喜の餘り執筆せるもの、同年秋の日本美術協會展覽會に出品して銅賞牌を得。

一〇四 楠公奉勅下山圖

一幅 下村觀山筆 侯爵 前田利爲氏藏  
楠木正成は笠置山に 後醍醐天皇の御台を受けて改めて勤王を誓ひ奉り、詔勅を奉じて下山、かくて生地に戻し城を赤坂に築いて賊軍に備へたのであつた。本圖は明治四十三年の作。

一〇五 楠公湊川合戦圖

一幅 富岡鐵齋筆 大阪 坂本光淨氏藏  
延元元年五月廿五日、楠木正成正末兄弟の軍は湊川に尊氏の大軍にあたり奮戦した。「正成進んで湊川に陣し、直義の陸軍に當りし間に尊氏の水軍もまた上陸して後より攻めかゝりしかば、正成大いに奮ひ戦ひたれども、衆寡敵せず、部下たいてい戦死し、正成も身に十一箇所を傷をうけたれば湊川の附近の民家に入りて自害した。富岡鐵齋は文人畫の大家、勤王の志士



でもあり、皇室中心主義者であつて本圖はその精神の發露とも見るべく、五十代の作である。なほ鐵齋は帝室技藝員、帝國美術院會員であつたが大正十三年八十九歳で歿した。

六〇

一〇六 船上山行幸圖 一幅 谷口香嶠筆 鳥取桑田安常氏藏  
名和長年が元弘三年 後醍醐天皇の隠岐よりの還幸を御迎へして船上に奉じた事は著名な事實である。作者谷口香嶠は畫を幸野模嶺に學び、特に歴史畫に長じてゐた。大正四年、五十二で歿した。

一〇七 北畠顯家 一幅 磯田長秋筆 東京村田由藏氏藏  
畫者は小堀範音門下、歴史畫に長じ、土佐風をよくする。本圖はもと「陸奥靈山に據る北畠顯家」と題し、帝展第六回に出陳せるもの。

一〇八 南北朝時代合戦圖 一幅 川邊御楯筆 東京帝室博物館藏  
川邊御楯、一代の代表作。精細なる描寫、絢爛たる賦彩、旺盛なる表現、さすがに故實に精通し、土佐の正系をついだ老手だけのものはある。御楯は筑後の人、花陵と號し、明治三十八年六十九歳で歿した。

一〇九 川中島合戦圖 一幅 柴田眞哉筆 東京梅澤隆眞氏藏  
柴田眞哉は柴田眞の次子、夙に書名高く、將來を囑望されつゝ天折して了つたので今日はあまり聞えてゐないが、當時は

非常な評判で特に川中島合戦圖は有名であつた。が惜しくもかの震災で焼失して了つた。本圖はその試作である。

一一〇 鐵騎刀槍 一幅 菅楯彦筆 鳥取桑田安常氏藏  
川中島にて上杉謙信が刀を振つて敵陣へ斬込む狀を寫せるもの、昭和五年の作、作者年少の頃、本居派の國學者鎌垣春岡翁につき、謙信流の兵學を聽きし、その感激を表現したのである。

一一一 賭戲 一幅 伊東紅雲筆 東京村田由藏氏藏  
圖は應仁の頃、武者達が合戦のあひま、忙しき寸暇をぬすんで、雙六の博戯に耽る連中の閑日月を主題としたもの、畫者は明治十三年東京生。村田丹後門人。この畫は大正十四年第六回帝展の出陳作である。

一一二 伊達政宗 一幅 今村紫紅筆 横濱原良三郎氏藏  
作者今村紫紅は明治十三年横濱に生れ、松本楓湖に學んで一新機軸を出す。大正五年歿、年三十七。本圖はその代表作の一

一一三 井伊の赤備 六曲一双 小山榮達筆 東京村田由藏氏藏  
作者は明治十三年小石川に生る。洋畫を本多錢吉郎に、日本畫を小堀範音に學ぶ。三十八年上野に獨力戰爭畫展覽會を開け



る事あり、本圖はもと題名を「武勇」といひしもの、舊文展第十二回に出品せし所にかゝる。徳川四天王の一人なる井伊直政が甲冑兵器すべて赤色のものを用ひ威容を整へたので、世に之を井伊の赤備へといつた。場面は關ヶ原合戦に例の井伊勢が島津義弘の陣に攻め寄せた光景、甲冑その他に考證を盡して描かれた作である。

一一四 勝 乎 負 乎 六曲二双 木島櫻谷筆 東京 土肥健男氏藏

文展第二回に出品、無鑑査二等賞を得たるもの。作者名は文治郎、明治十年京都に生る、今尾景年門。

一一五 二 龍 寶 台 一帖 村田丹陵・寺崎廣業筆 神奈川 關口 泰氏藏

廣業は秋田の人、初め狩野派を學び、後平福穂庵につく。明治畫壇の一家であつた。大正八年歿、年五十四。丹陵は東京の人、川邊彌楯の高足。廣業とは義兄弟である。共に日露戦役に従軍す。本畫帖はその記念の作、廣業が陸軍を、海軍を丹陵が擔當して描く。

一一六 軍 隊 舍 營 圖 久保田米僊筆 東京 西川義方氏藏

作者は嘉永四年京都に生る、鈴木百年に就き後東京に移り一派をなす。明治二十六年米國に遊び、歸朝後國民新聞社に入り、日清戦争に従軍、二十三年失明、三十九年五十五歳にて歿した。

一一七 水師營の會見、東郷提督凱旋圖 双幅 高橋廣湖筆 長野 町田清治氏藏

國定教科書の挿畫となつたもの、原畫、乃木將軍とステツセル將軍との會見と、東郷元帥の新橋驛頭における凱旋の光景と。歴史畫家として有名な廣湖畫伯が愛國の至情から揮毫した晩年の作。

一一八 乃 木 大 將 像 一幅 平福百穂筆 東京 高島米峰氏藏

明治天皇崩御より御大葬までの間、乃木大將は毎日参内したが、本圖は筆者が二重橋前を通行せらるゝ將軍をスケッチしたもので、左腕に喪章をつけ憂愁にやつれたる面目ながらの傑作である。



7

武  
具

三  
六  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十  
三十一  
三十二  
三十三  
三十四  
三十五  
三十六  
三十七  
三十八  
三十九  
四十  
四十一  
四十二  
四十三  
四十四  
四十五  
四十六  
四十七  
四十八  
四十九  
五十  
五十一  
五十二  
五十三  
五十四  
五十五  
五十六  
五十七  
五十八  
五十九  
六十  
六十一  
六十二  
六十三  
六十四  
六十五  
六十六  
六十七  
六十八  
六十九  
七十  
七十一  
七十二  
七十三  
七十四  
七十五  
七十六  
七十七  
七十八  
七十九  
八十  
八十一  
八十二  
八十三  
八十四  
八十五  
八十六  
八十七  
八十八  
八十九  
九十  
九十一  
九十二  
九十三  
九十四  
九十五  
九十六  
九十七  
九十八  
九十九  
一百



一一九 短

甲

胄 (復原模造)

東京帝室博物館藏

古墳時代の甲冑には、革製のものもあつたらうが、すべて朽失して遺品をとどめず、僅かに埴輪によつてこれを推知し得るのみであり、吾々が遺物として手にし得るものは、鐵板又は鐵小札を以てせるもののみである。それに、後世の鐵胸の如き拵のもの、小札を威したるものへの二型式を分け得るが、奈良時代に行はれた短甲は、その前者の系統のものであり、掛甲は後者と關係あるものと思ふ。

短甲には、鐵横板を銜留めたものと、鐵三角板を銜留か革綴にしたものがあり、縹纒ひたひたでこれを肩にかけたものであり、草摺を缺くを普通とするので、長さの短い甲、即ち短甲といはれたと思ふ。

短甲には普通胄の前がとがつた形のものを用して居る。肩鏡や籠手は常に伴ふものでない。

一二〇 挂

甲

胄

京都末永雅雄氏藏

古墳時代の甲冑に挂甲と呼ばれる形式のものあることは前段で述べた。鐵製の小札を糸又は革で威したものであり、短甲と相並んで用ひられたものであるが、これはに盾此かぶたの著しいところから盾此付胄と呼ばれる様式のものを用して居る。

一二一 重美 武装埴輪男子像

東京松原岳南氏藏

埴輪人物像は、死者葬送に陪従するものとか、喪祭を司るものとかを現したものであり、随つて武装の男子像はその數も少



かつたと見え、貴品の出土することも極めて稀れである。殊に本貴品の如く、武装よく整備したものに至つては、天下の珍といつてよい。即ち頭に鞆の深い脷を被り、身に挂甲をつけ、脚に脛甲ともいふべきものを纏き、太刀を佩き、背に鞆、即ち古代の矢を盛る具を負うてゐる。古史に鞆負の武士が儀式行列に随従した事を記してゐる。今、この鞆を負ふ姿を見るに、背の中央に直に立て、しかも鞆は飾鞆ともいふべく、左右に翼を飾り、矢も五六筋を盛つて居るのみであり、かつ矢を扱くに極めて不自由に背の中央に直に鞆を負うてゐるところは、實戦なり狩獵に臨む武士を現したものは思はれないし、まさに鞆負の武士はこれよと想はしめられるものがある。

一三三 頭 椎 大 刀

東京 帝室博物館藏

上古時代に行はれた大刀の拵の中で、最も著しいのはこの頭椎大刀である。柄頭がカブ即ち球状をなして居るところからかく呼ばれたのであらう。上古時代末期になつて盛んに行はれたものであり、上古時代の大刀拵の精華の頂點を極めてゐる。随つて古代人に強く印象されてゐたと見え、古史にも天孫降臨の際に天忍日命がこの大刀を佩びて先頭したと記し、神武天皇の御東征に、道臣命が、「おほさかの大室やに、入さはに、入りをりとも、入さはに、來いりおりとも、みつみつし、來目の子らが、頭椎、石椎もち、討してやまむ」と歌はれると、卒は俱に頭椎大刀を抜きつれて八十健を殺したとある。

一三三 環 頭 大 刀

東京 帝室博物館藏

柄頭に環をしつらへて居るところから、この名がある。古史に高麗劍と呼んでゐるのがこれであらう。正倉院御物のことを

記した『東大寺獻物帳』に銀莊高麗様大刀に銀で環頭をつくと註して居り、『萬葉集』などに「高麗劍わがかけゆゑに」などと、「わ」といふ語の枕言葉に用ひられて居ることによつて、これを知ることが出来る。即ち環頭大刀は、朝鮮を経て渡來した大陸様式であり、頭椎大刀の日本独自の發達の姿であることと相對比して居る。實際朝鮮にも多く類品があるし、支那では周漢時代に既にその發達を見て居り、六朝時代になると、環内に龍や鳥を飾つたものが盛んに行はれてゐる、而して我が上代人は、この外來様式を迎へても、その儘にこれを用ひず、漸次日本化して居る。こゝに陳列したものの如きは、その日本化の著しいものの一である。

一三四 蕨 手 刀 (復原模造)

東京 帝室博物館藏

柄頭が蕨の芽の如き形をして居るのでこの名がある。この形式のものは古墳出土品にもあるが、その古墳は末期のものが多し、奈良時代から平安時代のものであるので、大體にその時代を推定することが出来る。身が長く、太刀とすべきものもあるが、こゝに陳列したものの如く、身の長さが短くして刀の名に相應しくかつ身幅のひろいものはその前期、つまり、上古時代の末から奈良時代にかけてのものに多く見られる。

一三五 國寶 黒 漆 劍

京都 鞍 馬 寺藏

寺傳坂下田村麿所用とあるが、大刀身といひ、拵といひ、如何にも所傳の年代を肯き得るものがある。



身は直刀、切刃で鍋地廣く、棟小丸、刃文細直刃、銚子はやや「ふくら」がある。鍔は無地鍍金の山金で腰が低いのを特徴とすべく、柄・鞘は黒漆、殊に鞘は革繩きとなつてゐる。装具は鍔の鐵製なるを除いてすべて金銅製、足金物の山形及び鍔の形も身と時代を等うしてゐる。

一二六 壺

鏡

三重神宮徴古館藏

古墳時代の末期から奈良時代を経て平安時代にかけて行はれた鏡に甕鏡がある。爪先だけを突き入れる袋即ち甕の拵のあるを以て其の名があるが、これが支那・朝鮮に類例のないところを見ると、我が國に於いて輪鏡から發達したものと思はれる。傳世品極めて少く、正倉院御物及び手向山八幡舊藏のものを除いては本遺品著しく、かつ裝飾の點に於いては、これを最とする。

一二七 傳 楯 無 大 鏡

愛知猿投神社藏

源氏の家に月敷・日敷・源太が産衣・八龍・澤瀉・薄金・楯無・膝丸と夫々呼ばれてゐる八種の鏡を重代傳へてゐることは、『保元物語』に記されてゐるが、今はその殆んどすべてが散佚して仕舞ひ、山城石清水八幡にその一部をとめてゐる源太が産衣、甲斐國菅田天神社の楯無の鏡と、いまこゝに陳列してある傳楯無の大鏡とが、時代からいつても尤もと思はれるに過ぎない。

猿投神社のは、永く御神殿に藏せられて人の知るところとならなかつたものであるが、社傳では源氏八領の一である楯無の鏡として居る。併し應永二年、中條伊豆守詮房寄進の狀には、貞任宗任追討の時、伴次郎檢長武勳によつて義家より褒賜されたものとして居るところを見ると、かの『奥州後三年記』にある伴次郎備仗助兼が褒賜されたといふ薄金の鏡のことであるらしい。而して鏡そのものを見ると、兜は缺失、胴・大袖・脇楯各々式を異にし、胴は伏繩目糸威、脇楯は二藍染草威、大袖は小櫻黄返草威であつて、當初から一物であつたかどうかは明かでないにしても、革札二枚に鐵札一枚交ぜの拵であり、全體が大鏡としては古式に屬し、如何にも楯無とか、薄金とかいふ名に相應しい。なほこの鏡に附屬する鏡櫃には、蓋裏に

神物也人の物不入可、長祿二年二月十五日

の墨書銘がある。

一二八 國寶 鐵 鍬 形

長野清水寺藏

鍬形が兜の前に打たれ、以て威儀を示すことになつた最初が何年代にあるかは明かでないが、藤原時代とすべき大鏡に鍬形を具したものが無い。併し一般の武裝は藤原時代に定つた型式を得、鎌倉時代はその發展を見たのであること、『年中行事繪卷』に鍬打つた兜を破るものゝあるを見ると、矢張りその最初の年代が藤原時代か鎌倉時代初期であつたらうとしてよからう。

本遺品は、『信濃奇勝録』等に八枚あつたものであり、坂上田村麿將軍のものともあるものゝ一（今はこの一枚を残し、他を



佚してゐる。であるが、その年代は藤原時代か鎌倉時代初期にあるべく、その形は『年中行事繪巻』描くところに似て居り、またアイヌの寶物とする「銀先」の形の先容をなしてゐる。枝が臺に嵌込とならず、菊座の笠鉢を以て取付けられてゐるを古式となすべく、臺の雲龍文は平象嵌によつてゐる。

一三九ノ一 國寶 蛭 卷 太 刀

和歌山 丹生都比賣神社藏

源平時代を中心として薙刀又は太刀に蛭卷裝飾をしたものが盛行したことは、鎌倉時代以後の古書に多く描かれてゐることによつて知ることが出来る。蛭卷は鞘を堅牢にするといふ實用の爲めもあり、單純にして雄壯な味をもつて裝飾ともなつてゐることによるであらう。蛭卷太刀の遺品は極めて少いが、その中でこの丹生津比賣神社藏のものは、銀蛭卷、細作りに趣が合ひ、時代の好尚をよく表してゐる。

一三九ノ二 國寶 兵庫 鎖 太 刀

和歌山 丹生都比賣神社藏

足革が兵庫鎖と呼ばれる鎖造になつてゐるのでその名がある。又鞘を板金物で包み、その上下に長い覆輪をかけてゐるので長覆輪太刀といふ名もある。源平時代を中心として武將の間に用ひられたものであり、大社に軍將の名によつて奉納せられたものも少くなかつたと見え、遺品も十數口に達してゐる。

丹生津比賣神社所藏のものに、口あり、共に眞品たることを失はないが、これは鞘に裝飾があり、其の圖文より見て盛期

に於ける作と見得られる。

一三〇 黒 塗 籠

愛知 熱 田 神 宮 藏

古く『集古十種』にもせられて居り、人の間に著聞してゐる。方立ほうたてや矢櫛やぐしみを裏うらにて編め丹塗してゐる。鎌倉時代に遡り得るものであらう。

一三一 重美 革 籠

愛媛 大山 祇 神 社 藏

黒革包み、方立の前左右の三方に蜻蛉形を打つてある。社傳和田義盛奉納とある。現存革籠の最古の遺品としてよい。

一三二 重美 鐵 蛭 卷 薙 刀

河内 譽 田 神 社 藏

社傳源頼朝奉納とある。身は無銘、業物と見ることは出来ないが、柄を木製黒塗とし、これに鐵蛭卷したところは、所傳の時代に近きことを物語つてゐる。

一三三 舌 長 鏡

東京 帝 室 博 物 館 藏

舌長鏡は甕鏡の舌が著しく長くなつた様式のものであるが、藤原時代から鎌倉時代へかけて一時行はれただけと見え、遺物は極めて稀である。

75  
2



本遺品は熊本縣の目遺瀨發見、細川侯舊藏のものと箱書にある。土中品の爲め、木部等は朽失して仕舞つてゐるが、大體は鐵製、覆輪鉸具・花形笠鉸等の金具は銅製、紋板の透し・母衣付・胸の覆輪下に鍍金小刻の座金物を打つてゐる。全形雄渾・氣魄に富み、鎌倉時代前期のものとしてよい。

一三四 國寶 螺 鈿 鏡 鞍

東京御嶽神社藏

『武藏名勝圖繪』に空鞍と記し、四條天皇の勅を蒙り、散位大中臣國兼が神馬に鋳つて奉納したものと註してゐるが、今は神馬なく、かつ鞍・鏡ともに唐鞍のものではなく、鞍は鏡鞍、鏡は珍しくも舌長である。

即ち鞍は前輪・後輪・居木を具備し、居木は黒漆に蛇の目の厚貝を鈿し、前輪 後輪に金覆輪をかけてゐるし、鏡は舌長、金具はすべて銅製、紋板の方形透しや胸板の覆輪下に小刻の座金物を打ち、紋板の上邊、鉸具の下に向ひ鶴毛彫の紋金具を裝飾してゐる。

一三五 國寶 螺 鈿 時 雨 鞍

侯爵細川護立氏藏

鞍橋も居木も備り、前輪に手形をつけた形式であり、黒漆塗、前輪後輪には『新古今集』慈圓の

「我戀は松を時雨のそめかねて 眞裏が原に風さわぐなり」

といふ歌の意を螺鈿で表した尊手繪の裝飾が施されてゐる。



螺鈿工藝の發達著しかつた藤原・鎌倉時代の好尚は馬具の裝飾にまでこれを及ぼしたのであり、この種裝飾の現存遺物も數例を擧げ得るが、次の柏木菟鞍とともに鎌倉時代製作となし得るものゝ中での尤物とされてゐる。

一三六 國寶 螺 鈿 柏 木 菟 鞍

侯爵細川護立氏藏

前輪・後輪・居木の三つを完備し、前輪に手形をつけてゐる。黒漆塗・前輪・後輪には螺鈿を以て柏木に木菟を配せる圖文を表してゐる。傳へて細川義孝が將軍義輝より受領せるものとしてゐる。

一三七 赤 木 柄 短 刀 (略模造)

東京帝室博物館藏

中世に行はれた短刀の中に、柄や鞘に胴金を入れた様式のものがある。本品はその様式のものゝ中で年代の最も古いものと考へられてゐる神奈川縣箱根神社藏、曾我時致が富士の裾野で工藤祐經を刺した時に用いたものといふ所傳のものを模造したものである。

一三八 巴 造 短 刀 (模造)

東京帝室博物館藏

これも柄や鞘に胴金を入れた様式のものであり、伊勢藤原侯の家の中佐伯某に、祖先緒形惟義から傳來のものを藏してゐたのを模造したのであるが、原品は今も行方を失つてゐる。

一三九 籠 手

奈良春日神社藏

75  
2



義經の用ひたものといふ社傳があり、世に義經籠手の名が著しい。中世の籠手としては最古の遺品といふべく、その手申、座板等に試みられた彫金裝飾の細緻巧妙は驚くべきものがある。鎌倉時代後期に比定すべく、金工藝の優品としてもよい。

一四〇 犬圓山形星兜

和歌山 加太神社藏

大圓山形、二十六間の星兜、二方目、前には鍍金鑄垂を三條、後に二條垂れてゐる。笠印の鍍は十六花の菊花座と切籠頭。鍍を具備してゐる。眉庇は黒塗で金銅の覆輪を施し、鍍形臺は金銅で素文、二光鍍は中央を笠鍍とし、左右は鍍形臺の居文と合ふべく菊座鍍としてゐる。鍍形は金銅製、丈は低いが、先をひろげて時代の特色を見せてゐる。

輪は今二段を存するのみ、本小札、黒塗赤韋威、吹返に小刻二重、裏菊二重の座板を有する大笠鍍を居多て居り、八双金物は小刻二重裏菊一重の座に笠鍍を打つて居る。残存する二の板に菱縫を朱漆を以て描いてゐるのは面白い。鉢の短徑七寸二分、長徑八寸二分、高四寸、護良親王御料のものといふ社傳がある。

一四一 黒韋威胴丸

奈良 春日神社藏

社傳楠木正成奉納とあるもの、拵は胴丸であるが、大鍍の如くに背に逆板あると、矢筈札を用ひてゐるのを珍とする。

兜は黒塗三十二間の筋鉢、二方白、鍍形は鍍金、鍍形臺は魚子地に菊枝を鍍彫して居り、菊座の大笠鍍を以て眉庇に留めてゐる。眉庇は獅子牡丹草を以て表を、引目草を以て裏を包んで居る。浮張は心に蒲を組んだのを入れ、馬皮溜塗、十間を短き

合せてゐる。兜緒揚の鍍は二所、緒は缺失、今用ひてゐるのは後世のものである。鞆は本小札五枚、四枚を吹返し、それを獅子牡丹草で包み、菊座の大笠鍍を打つてゐる。笠鍍の形式であり、威毛は黒草、耳糸や畦目は紺・淺黄・白の驟木、菱縫は紅草となつてゐる。

胴は黒塗の矢筈札で、長側は四段となつて居り、すべてが胴丸仕立であるが、押付の二の板に革小札の狭い逆板をつけ、それに透彫菊座、切子頭の大形座の鍍を打つてゐるところは大鍍に似て居る。草摺は五段八間、前のは一二の段だけが矢筈札であるが、他はすべて本小札、袖も同様に本小札、袖に打つた笄金物は鍍金奈良菊透彫、袖付や水吞の緒は籠手摺と共に缺失してゐる。

籠の製作年代からいつても、正成奉納の所傳を裏書してゐる。

一四二 國寶 藍革威腹卷

根島 日御碕神社藏

本小札、長側が三段、立摺は前も後も共に二段であることに注意させられる。修補がよく整ひ、殊に安政三年にこれを全手うしたことは、威毛の所々に「安政三年」の墨書のあることによつて推知することが出来る。

社傳には元弘三年名和長年が賊徒平定祈願の爲めに寄進したとある。

一四三 熏韋包腹卷

東京 帝室博物館藏

75  
2



吉野朝の忠臣恩地左近の着用と傳へられてゐる。由來、腹巻なる鎧の名は、鎧に對して用ひられ、後世いふ腹巻・胴丸。腹當の如く、兜や袖を具することなく、又籠手や臙當等の小具足をも添へず、單に腹部のみを纏ふ略式のものゝを總稱してゐたが、室町時代に入つては、これが狹義のものとなり、こゝに示したものと如く引合を背部におく様式のものゝみの特稱となり、胴丸・腹當などの名と共に、夫々略式鎧の一形式名となつたのである。

本鎧は伊豫札を以てし、胴・草摺ともに襦袢で包み、淺黄木綿で菱縫してゐる。金具廻は縮纏と共に馬皮溜塗、金具は鍍金。所々に補修のあとをとどめてゐるが、大體に舊態を存してゐる。拵からいつても吉野朝時代といふ所傳を信じてよい。

一四四 牡丹造短刀 (模造) (原品阿蘇神社藏) 帝室博物館藏

原品は銀造、鍍金のおとが微かに残つてゐる。金銅牡丹唐草文の浮彫を以て柄・鞘口・鞘尻を又金色繪牡丹唐草文を以て鞘間を裝飾してゐる。小柄は缺失、身は足利時代中世頃のものらしい。

社傳には菊池武光が奉納したとあるが、西嚴殿寺所藏の天文六年正月十日附の文書にある「御劔牡丹作」とあるのがこれであるとするれば、古くは征西將軍懷良親王御料と考へられてゐたとも思はれる。

一四五 菊池鑓身 東京山田準次郎氏藏

鎌倉時代の終頃から、薙刀が漸くすたれ、再び鑓の行はれる時代となつた。その鑓の身は莖作を特徴とし、身は兩及を貫通

としたが、この菊池鑓と呼ばれるものの身は、短刀身の莖の長いとも見るべく、片及の作りである。この鑓のつくられたことについては一の傳説がある。それは正平十四年七月、菊池武光が懷良親王を奉じて少貳頼尙一族と筑後川に合戦した時、武光の子武政は士卒に命じて短刀を竿頭に着けたものを以て戦はせて敵を惱ませた。これに因んで、菊池氏は後に肥後延壽に命じて片及の鑓身をつくらせたのであり、これによつて菊池鑓の名があるのだといふのである。

ここに陳列した一は筑州住「家永」他の一は肥後菊池住「國村」の銘がある。

一四六 楠公の旗 大阪葛井寺藏

「非理法權天」の文字のあるを以て人に知られてゐる。

一四七 三島水軍旗 愛媛大山祇神社藏

二幅の白麻を縫合せ、これに二引きの下に角折敷に縮み三の字の紋章を表し、上に伊勢・八幡・三嶋の神號を書いてゐる。河野通信奉納と傳へられ、三島水軍の旗とされてゐる。この種の旗を海風に靡かし、群雄の間に活躍した三島水軍の威風凛々るに追懐に堪へないものがある。

一四八 鎧直垂 公爵毛利元昭氏藏

毛利元就が將軍義輝より下賜せられたものと傳へられてゐる。赤地鎧、桐丸に散雲文、裏は黃色染本絹、袴の腰は白練、菊綵は黒染生糸と思はれる。赤地鎧直垂の語は源平合戦を記せる軍記もの等に散見してゐるが、遺品はいまのところは、本品

75  
2



を最古のものとする。

一四九 空

穂

京都 瀬尾石根氏藏

中世から近世に行はれた矢を盛る具としては、腰とか胡録とかの名が人に知られてゐるが、この空穂も古く盛矢具として用ひられてゐたことは繪巻物等にも散見して居ることによつて知るべく、或は遠く古代にその形の起源を求めることが出来る。かくして空穂は中世の盛矢具としては著しいものゝ一であるが、遺物は多く取佚しさり、こゝに陳列したものなどが最古のものとなつてゐる。室町時代のものであらうか。

一五〇ノ一 弓

奈良法隆寺藏

我が國に於いては、上古時代から平安時代に亘つて丸木弓であり、中世に入つて木と竹とを合せた合せ弓の行はれたことは弓の歴史として著しいことである。随つて中世を通じて竹と木とがどんな風に合せられて行くかを見るとこゝに興味がある。

法隆寺西圓堂は、室町時代末期を中心として奉獻の弓の多くがあるが、こゝに陳列したものは、

法隆寺西圓堂藥師御寶前

弘治二年丙辰三月三日

和嘉高田之内

少貳敬白

の刻銘があり、室町時代末期のものであることを知るが、腹及び背に伏せた竹のうち、背のは再びまで及んではゐない、心をなす木部が表れてゐるのを見、丸木弓の趣が一部に残つてゐるを知ることが出来る。

一五〇ノ二 打

刀

奈良法隆寺藏

打刀は室町時代頃から著しくなつて來た。これが江戸時代に入つて大小の大となつたことはこれを更めて説くまでもない。

こゝに陳列したのは鞘黒塗、柄鮫、鍔は素銅、片櫃即ち小柄の櫃孔のみを有するもの、切羽は一重となつてゐる。室町時代の打刀としては普通の様式であらう。

一五〇ノ三 腰

刀

奈良法隆寺藏

鞘黒塗、丸尻、柄は黒鮫の上を革巻してゐる。鍔は革製、喰出鍔、鞘に

「伊賀國ナンハリ天文十四年乙巳八月十三日」

の切銘がある。室町時代末期の腰刀の一例といつてよい。

一五一 三 寶

荒神兜

伯爵伊達興宗氏藏

室町時代の末期に就いては、武人が兜や旗差物の裝飾に奇異を競うたことは前に記した。かの上杉謙信が武田信玄と雌雄を

75  
2



決して泊撃を試みた際の用とされてゐる。鉢は日根野形、鞆は五段、うち一段を吹返し、居紋に「犬」の字を表してゐる。而して前立物に張抜きで荒神の面容を張抜きで以てせるものを三方に配してゐる。

一五二 秀吉の陣羽織

男爵伊木忠愛氏藏

羽織は室町時代にその起源をもつ、十徳等の服装から變つて來たものといふ説もあるが、その襟を著しくするところは、當時新に渡來して人心に著しい刺激を與へた南蠻人のマントに教へられたところのあるは疑ふべくもない。陣羽織は羽織の一種としてよいが、行動の便宜を求めて無袖を喜通とする。

一五三 葦穂蒔繪の鞍鐙

東京帝室博物館藏

豊臣秀吉が狩野永徳に命じて下繪を描かしめ、それによつて蒔繪裝飾したものと著しい。鞍は水干鞍の形式に屬するもの、金覆輪、居木に「文安二九月日花押」と刻銘がある。鐙はその紋板正面を金覆輪とし、紋板被格子透しは沃懸、刺金の下に松皮菱紋の蒔繪があり、脊込には朱塗を施してゐる。而して鞍の前後輪及び鐙の兩突は黒染地、葦穂文を高蒔繪にし、葉脈及び莖を金鍮で裝飾してゐる。秀吉下命によるといふ永徳の下繪には「天正五年正月中日秀吉(花押)」と墨書があり、鞍鐙に副へて今日に傳へてゐる。雄渾瀟灑なる文様、華麗なる裝飾は、まさに桃山時代の好向を示すものといふべき。

一五四 一の谷兜

東京帝室博物館藏

戦國時代頃から戦術が變り、團體戦を専らとした。勇名を競ふは武夫のつね、群がる軍兵の裡に、自己を印象させる爲めに、旗差物の裝飾や兜の形に奇を競うた。この一の谷兜もその時代好向を示すものである。

本品は徳川家康所用とせられるもの、鉢は鐵製、銀箔押、日根野形、鞆は鐵銀箔押切付札、五段下り、一枚を吹返し、葦製銀箔押の頭立、檜製釘形銀箔押の後立をたてゝゐる。

一五五 日本號鐘

侯爵黒田長成氏藏

三鈎俱利伽羅龍の彫りがあり、柄は青貝磨り、大身の鐘である。もと福島正則が豊臣秀吉から拜受して秘藏してゐたものを黒田の家臣母里伯馬が酒席で獲て歸つた「飲取りの鐘」のことは講談で有名である。

一五六 清正所用十文字鐘

東京帝室博物館藏

清正の鐘といふと、朝鮮の虎退治に使つたものが人口に膾炙してゐる。本遺品は十文字鐘ではあるが、横手の一方の長さが短いのは最初からのもので、虎の爲めに噛み折られたといふ俗説を裏書するものではない。

身の長は三二・七釐、無銘、柄は長さ三三三・三釐、檜木製で青貝摺、鐵製の石突きは八角につくり、本の部分に波文を大體に銀象嵌を以て表し、先端の鍮金は鐵製のものに桔梗唐草を線刻にして居り、これに接して青貝摺桔梗紋の目釘座がある。

75  
21



紀州徳川家に永く什寶として藏せられたのを明治初年に帝室博物館に寄贈せられたのであり、茲に

「加藤清正息女瑤林院様御入興之節御持込」と書いてあるところを見ると、清正所用の説を信じてもよからう。

戦國時代から桃山時代へかけては、火器の傳來によつて従来の戦法に一大革新が促され、武器・武裝にも著しい變革が起つてはゐたが、鎧は密集隊形の戦法にも依然として重んぜられ、これについての武功談も種々と傳へられて居り、當時の武士もその身や拵に意を凝した。この十文字鎧の如きは、今日まで傳へられてゐるものゝ中でも、身といひ、拵といひ、當時の尤物であつたと想はれる。

一五七 丹 波 弓

京都 瀬尾石根氏藏

弓の一種とされてゐる。弓幹を黒塗し、藤を以て九ヶ所をまいてゐる。

一五八 錦 旛

東京 帝室博物館藏

有栖川宮熾仁親王御遺物の一である。赤地錦、金糸で菊花紋を纏うてゐる。なほ竿頭飾物として木製黒塗の框に八稜鏡形をつけ、錦紐でこれをつひ、かつ白毛を圓形に植ゑたもの、及び木製金泥塗の球及總角二個をつけてゐる。

「宮さんく」の俗歌で人々に膾炙してゐる錦旗がこれであるか、どうかは明かでないが、本遺品が親王御東征の際調製されたものであることは明かである。

新 畫 (洋 畫)

751  
21



一五九 御物

日 清 戦 争 圖 六面 山本芳翠筆

- (一) 吉田少尉部下の二十七勇士を率ゐて金州城壁を登る圖
- (二) 旅順總攻撃の前夜土城子附近野營の圖
- (三) 旅順没落の日敵の地雷火背面二龍山爆發の圖
- (四) 敵艦清遠沈没の圖
- (五) 威海衛海陸總攻撃の圖
- (六) 全軍將校悉く旅順口に集り戦勝を祝する圖

一六〇 伏見宮家御所藏

伏見宮臺灣御奮戦圖 一面 山本芳翠筆  
伏見宮威海衛御攻撃圖 一面 同 上



山本芳翁は岐阜縣人、初め五姓田芳柳に學び、後フォンタネージにつく。明治三十九年十一月歿、年五十七。

一六一 野 戰 病院 圖 一面 五姓田芳柳筆 東京美術學校藏

五姓田芳柳は初め浮世繪を井草國芳に學び、後狩野派に轉し、更に長崎にて見る所の和蘭畫を追想して遂に一派を開く。明治十年西南の役に數百の負傷者を描き、後考に供せり。廿五年歿、歳六十六。

一六二 日清役從軍スケッチ・ブック三冊 黒田清輝筆 東京美術研究所藏

黒田子爵は慶應二年鹿兒島に生る。明治十六年渡歐し、二十六年歸朝。印象派の畫風を輸入して明治洋畫壇に貢獻せる事大なるは世界周知のところ。本スケッチは親しく明治二十七八年戰役に從軍して寫せるもの。

一六三 金州城内新聞記者及畫師宿舍内部 ペン畫一面

黒田清輝筆 東京美術研究所藏

圖に背を向けたるは山本芳翁、手に扇をとり火を煽げるは大阪朝日新聞記者大野鐵腕である。

一六四 戰 後 の 捜 索 一面 淺井 忠筆 東京帝室博物館藏

淺井忠は安政三年江戸に生る、彰枝堂及びフォンタネージにつき、明治三十一年東京美術學校教授となり、後京都工藝學校

に轉す、四十年歿、年五十二。

一六五 瀨 家 屯 天長節祝宴 一面 淺井 忠筆 東京淺井眞氏藏

中央に立てるは大山元帥、後向なるは乃木大將である。

一六六 碧 流 河 架 橋 圖 一面 淺井 忠筆 東京淺井眞氏藏

日清戰爭スケッチの一、十一月三日寫。

一六七 金州新聞記者宿舍 水彩 淺井 忠筆 東京淺井眞氏藏

黒田清輝氏と同じ宿舍を描けるは面白い、人物も亦同じである。壁上の聯に明治二十七年十二月三日金州にて寫の文字見ゆ。

一六八 平 壤 戰 争 圖 一面 金山平三筆 東京作 者藏

明治神宮繪畫館下圖。圖は明治廿七年九月十五日平壤戰中、大島義昌將軍の混成第九旅團が奮闘の光景。作者は神戸に生れ、東京美術學校に入り卒業後フランスに留學、帝展審査員となる。

一六九 黄 海 々 戰 圖 一面 太田喜二郎筆 大阪商船株式會社藏

明治神宮繪畫館にあるもの下繪、筆者は京都の人、東京美術學校卒業後白耳義に留學、クロオスの影響を受けて新印象派

751  
21



の手法を寫實に交へてゐる。圖は明治二十七年九月十七日日清兩艦隊黃海に戰ふ光景。

二七〇 旅順攻撃の圖 一面 本多錦吉郎筆 東京佐藤部隊藏

明治三十年二月の作、本多氏は廣島藩士、嘉永三年江戸に生る、明治初年國澤新九郎の門に入つて、塾頭となり、後同塾をつぐ。十七年陸軍士官學校教授に任せられ在職二十余年、大正十年歿す、年七十二。

二七一 戦の 話 一面 滿谷國四郎筆 東京加納百里氏藏

明治二十五年第五回太平洋畫會出品。作者は明治七年生、初め五姓田芳柳に學び後不同舎に入學。昭和七年帝展に「緋毛氈」を出品して「朝日賞」を贈らる。昭和十一年六十三歳で歿した。

### 追加

- 一八 幡 縁 起 一卷 大阪村山長舉氏藏
- 二 重美 大阪合戦圖 一幅 侯爵黒田長成氏藏
- 三 三島水軍城塞圖 一幅 愛媛大山祇神社藏
- 四 大塔宮出陣圖 一面 横濱長谷川龜爾氏藏
- 五 毛利元就像 一幅 公爵毛利元昭氏藏
- 六 本多忠勝像 一幅 子爵本多忠昭氏藏
- 七 毛利元就書狀 一幅 公爵毛利元昭氏藏
- 八 大石良雄自筆書狀 一幅 東京保阪潤治氏藏
- 九 荒鷺の繪 勝海舟筆 侯爵西郷從德氏藏
- 一〇 大山君東行錢 西郷南洲筆 侯爵西郷從德氏藏

751  
21



- 二一 大山元帥書「國光」  
公爵大山柏氏藏
- 二二 竹圖歌贊  
大山元帥筆  
東京石井忠利氏藏
- 二三 山縣元帥書二幅  
公爵山縣有道氏藏
- 二四 黃海戰捷歌  
伯爵伊東靖祐氏藏
- 二五 野津元帥書  
侯爵野津鎮之助氏藏
- 二六 川村元帥書  
子爵川村景敏氏藏
- 二七 東郷元帥書及日誌  
侯爵東郷彪氏藏
- 二八 寺内元帥自畫贊一幅  
伯爵寺内壽一氏藏
- 二九 加藤元帥書一幅  
東京木村甚三氏藏
- 三〇 武藤元帥書一幅  
東京武藤能婦子氏藏
- 三一 伊藤博文書狀  
東京栗野齋治郎氏藏
- 三二 日露戰役スケッチ  
東京寺崎廣載氏藏

- 二三 太刀(正倉院御物模造)  
東京帝室博物館藏
- 二四 龜甲地螺鈿鞍  
東京井上恒一氏藏
- 二五 國寶白綾威大袖  
愛媛大山祇神社藏
- 二六 革褰太刀  
公爵毛利元昭氏藏
- 二七 毛利元就公旗  
公爵毛利元昭氏藏
- 二八 信長胴丸  
京都建勳神社藏
- 二九 鎧兜(脇坂安治着用)  
横濱原良三郎氏藏
- 三〇 廣瀬中佐旅順閉塞圖  
松岡壽筆  
神奈川作  
者藏
- 三一 日露戰役スケッチ  
小杉放庵筆  
東京作  
者藏
- 三二 朝鮮征伐の圖  
公爵島津忠重氏藏
- 三三 島津義弘書狀  
公爵島津忠重氏藏
- 三四 賴三樹橋本左内書  
子爵松原慶民氏藏



751  
21

本展覽會好箇の記念畫帖成る！

# 戰爭美術展號

アサヒグラフ

臨時増刊

四六四倍判・表紙前田青邨畫伯筆  
口繪三色版アート紙刷「殿」  
「關原合戰屏風」・グラビア六四頁

定價一圓・朝日新聞社發行

三五  
尺  
三六  
詩

牘 軸

木戸孝允筆 侯爵木戸幸一氏藏  
木戸孝允筆 侯爵木戸幸一氏藏

九四



751  
21

751  
21

東京朝日新聞  
創刊五十周年記念

戰爭美術展覽會目錄

昭和十三年五月十七日印刷  
昭和十三年五月廿二日發行

定價十五錢

編輯兼發行  
兼印刷人

東京市麴町區有樂町二丁目三番地  
東京朝日新聞發行所

星野辰男

發行所

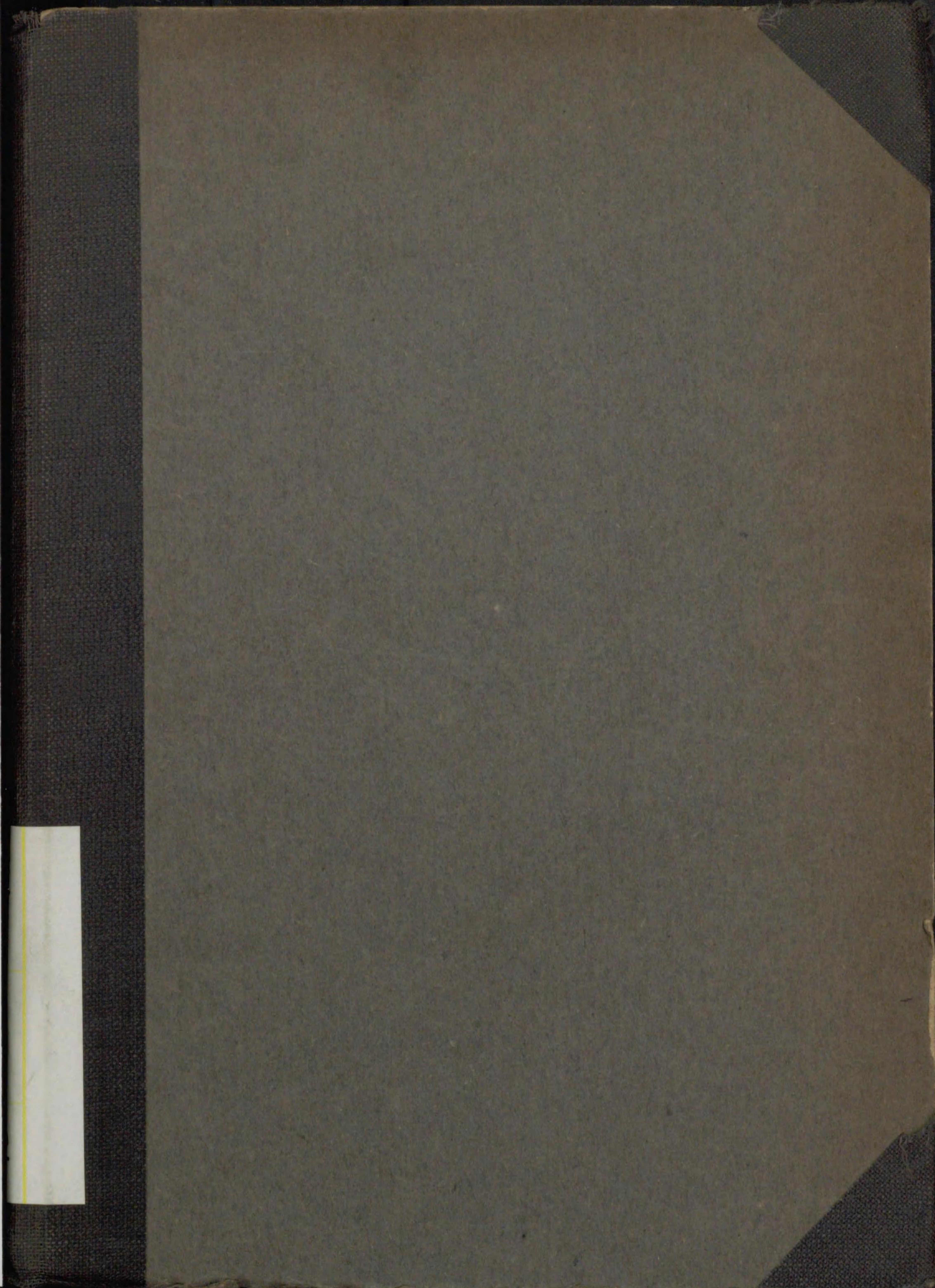
東京市麴町區有樂町二丁目三番地  
東京朝日新聞發行所



751  
21

東京朝日新聞社編





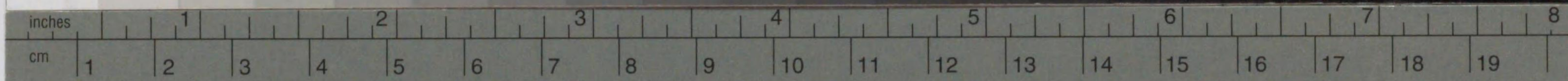


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

